
魔法少女リリカルなのはGuardian

剣風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはGuardian

【Nコード】

N0616S

【作者名】

剣風

【あらすじ】

高町なのは、十七歳。喫茶店『翠屋』の二代目パティシエを目指して修行中。そんな彼女のクラスメートは、海鳴市の平和を守る『守護者』——ガーディアンだった。街の平和を守る少年の戦いを見守るなのは、何を思うのか。

魔法少女休業中／魔法剣士は同級生

闇がどこまでも続く場所だった。

空気はジメジメして、地面には深さ二センチほどの水が張られている。それ以外には何も無い。ただ、がらんとする空間。

少年がただ一人、そこにいた。

ズボンもジャケットもブーツも黒で統一し、羽織るマントのみが白い。左腕を金属製の籠手でガードし、右手には一振りのサーベルを携えていた。

そのサーベルは、峰の部分に鱗状の彫刻が施されている。柄頭は蛇の頭を象っており、開いた口に青い宝玉がはめこまれ、サーベル自体が一匹の蛇を思わせた。

若き剣士は闇の中を、茂みに隠れつつ獲物との距離を測る肉食獣のように、じっと見据えていた。

チャプ……。

そんな音と共に、闇の向こうから水面に波紋が広がる。

そして、細長い鞭のような影が六つ、少年めがけて闇の中から躍り出た。

「ハアッ！」

気合い一閃、素早い剣捌きで少年はその影を切断する。

何かの触手が、地面に落ちてのた打ち回った。

「吼えろ、轟炎」

少年はサーベルを逆手に持ち替え、柄頭を闇に向ける。青い宝玉が煌めき、青白い光の魔法陣が発生した。

「フレイムバースト！」

その魔法陣から、ゴウツ！ と強烈な火炎がほとばしる。

その炎が、襲撃者を捉えたらしい。闇の中から人間ではない獣じみた悲鳴と、それがのた打ち回って立てる、バシャバシャという水音が聞こえてきた。

「とどめだ！」

少年はサーベルを持ち直し、その音の方へと突き進む。蛇身に似た刃が、青白い光を帯び始めた。

闇の中に、敵の姿がおぼろげに浮かぶ。

ぶよぶよした肉塊にも似たその影に、少年が光り輝く刃を突き立てようとした瞬間、彼の前に霧に似た壁が現れる。

影はその壁の向こうで、溶け込むように消えた。

少年が苛立たしげに霧の壁をサーベルで切り裂くと、それは文字通りに霧消した。

「逃げたか……」

それとも、誰かが逃がしたのか。胸の内でそうつぶやいた時、波音が耳に響いた。

思わず振り向けば、高さ五メートルはあろうかという大波。

「魔導の光よ、悪しき空間を断つ牙となれ」

《デイメンションブレイク》

柄頭の宝玉が煌めき、そのような電子音声が響く。

刃が再び青白く輝き、少年は目の前の何もない虚空をその刃で斬った。

するとそこに裂け目が生まれ、光が差し込んできた。

大波に飲み込まれるその寸前に、少年はその裂け目に飛び込んだ。

「あゝ歌った歌った」

時計の針が七時を過ぎる頃、カラオケボックスから、髪を茶髪に染めた少女が出て来た。

その連れ合いと思しき少女が二人、やはりスッキリした顔で出て来る。かなり熱唱したようだ。

一人は青みがかった黒髪をおかっぱ風に切りそろえ、もう一人は栗色の髪を頭の左側でポニーテールに結んでいる。

三人が三人とも同じ制服——聖祥大附属高校の制服に身を包んでいた。

茶髪の少女は初丘理紗。

黒髪の少女は三木鞘香。

そしてサイドテールの少女は高町なのは。

十七歳の高校二年生。何かイヤな事があれば、そして何かイヤな事がなくとも適当な理由を作って、一緒に小遣いの許される範囲で遊び回る間柄だ。

「てゆーか、理紗は歌いすぎだよ。もうこんな時間になっちゃったじゃない」

「えー？ まだ全然大丈夫でしょー？」

鞘香の言葉に、理紗は口を尖らせる。

「私やあんたは大丈夫だけど、そうじゃないのが一人いるでしょ？」

「あつ……」

理紗がチラリとなのはを見やる。

「なのはのお父さん、厳しいんだっけ？」

「私等が男だったら、殺されてるわよ」

「人聞きの悪い事言わないで」

何気にひどい事を言う鞘香に、なのはが弱々しく突っ込む。

とは言え、夜まで遊び回った相手が男であつたなら確かに激怒しているであろうと、なのは自身思う。

「一応、遅くなるってメールは入れといたから大丈夫だとは思いつけど……」

自信がないのか、最後はゴニョゴニョと口ごもるなのは。

「しゃーない。私達が一緒に謝ってあげるよ」

理紗がその背中をポンポンと、元気付けるように叩く。

「みんなでごめんなさーって謝れば、パパさんも許してくれるって」

鞘香も嫌がる素振りすら見せずに言う。

「あ、ありがとう」

「その代わり、今度何か美味しい物食べさせてよ？」

「うん！」

なのは嬉しそうな返事を理紗に返した。

そして三人はなのはの家へ、ペチャクチャとお喋りしながら向かった。

近道になるからという事で、途中にある公園の中を通る事にしたのだが……。

「あれ？」

三人の少女は足を止め、異口同音に声を上げた。

公園を突っ切る遊歩道。外灯が、その真ん中に出来た大きな水溜まりを照らし出していた。

「雨なんて降ってなかったよね？」

当然の疑問を口にするなのは。

「そんな深くもないし、パッパツと渡っちゃおうよ」

「最悪……この靴、買ったばかりなのに」

特に気にしない鞘香に、靴が汚れるのを嫌がる理紗。

「それにしても、何でこんな所に水溜まりがあるのかな……？」

なのははどうにもそこが気になるらしい。

水溜まりは畳一枚分程度の広さだが、雨が降っていた訳でもなし、誰かが水をまいたのだとしても、夜までこんな大きな水溜まりが残るのはおかしい。

「どうでも良いじゃん、そんなの。早く行こっ」

鞘香が先陣を切って足を踏み出した。理紗がぶつくさ文句を言いながら続く。

なのはは腕時計に目線を落とした。帰りが遅くなれば、一緒に遊んでいた二人にも父の雷が落ちるかも知れない。それにくらべたら靴が汚れるくらいと言う事もないだろうと考えていたら――、

——ドボンッ！

なのはの前で、そんな水音がした。

腕時計から正面に目線を戻すと、鞘香と理紗の姿はなく、水溜まりの水面に、たった今何かが落ちたかのように波紋が浮かんでいた。
「——え？」

なのはは思わず辺りを見渡し、二人の姿を捜してしまふ。
だが夜の公園はシンと静まり返っており、二人の姿はどこにもない。

「理紗……？ 鞘香……？」

おずおずと呼びかけてみるが、返事はなかった。
静かすぎる。

草むらから虫の音がしても良いはずだ。

公園の外から、通りすぎる自動車の音がしても良いはずだ。

なのに、何故こんなにも静かなのか。

（まさか……！？）

なのはは本気で、二人が水溜まりの中に落ちたのだと思ってしまった。

誰かが悪戯で作った、水溜まりに見せかけた落とし穴にはまってしまったに違いない。

レンガを敷き詰めた遊歩道でそんな事は有り得ないが、余りの静けさと突然の出来事に、なのはは正常な思考能力を半ば失いかけていた。

しゃがみこみ、水溜まりの中を覗き込もうとした瞬間、少女の細い手首に、ヌメヌメした触手が一本絡み付いた。

「——っ！？」

なのはが悲鳴を上げるより先に、水音と共に彼女の体が引きずり込まれた。

後には、なのはの落とした鞆だけが残されていた。

目を逸らした隙にテレビのチャンネルを変えられたような気分だ。それくらいなのは目の前の光景は変化していた。

周囲は果てしなく広がる闇。

体に巻き付いた触手で持ち上げられている自分。

すぐそばに、同じように触手に捕らえられた友人二人。

そしてその触手を伝うように目線を下ろせば、花に似た怪物がそこにあった。

もつとも、花を思わせるのは全体の形だけだ。表面は触手同様にヌメヌメしており、体の中心にはパツクリと大きな割れ目がある。なのはの目には、それが怪物の口に見えた。

(……………?)

よく見ると、怪物の体には炎であぶられたかのように焼け焦げた部分もある。

「わひゃっ!？」

観察していると、不意に別の触手で身体をまさぐられて、なのはは奇声を上げた。

触手の先端がミニスカートの中に入り込み、内股を撫で回す。

「え、まさか……いやっ! やだあっ!」

自身の純潔を狙われていると思い込んでもがくなのはだったが、怪物の狙いは違う。

触手の先端で血液の流れる脈拍を感知し、そこから血管の位置を探り当てる。

触手の中の針が、探り当てた血管に麻痺の効果を持つ体液を注射した。

それは即効性があり、なのはは直に身体感覚を失い、声を上げる事も出来なくなった。同時に、何故二人の友人が動かないのかも理解する。

(このまま、食べられちゃうの……? あんな怪物に、訳もわからないまま……)

嫌だ。

そんなのは嫌だ。

脳裏に、自分の帰りを待つ家族の顔がよぎる。

今でこそ交流の少なくなった、かつての友人たちの顔も。

そして、かつて自分の小さな手に握られていた金色の杖。

その魔法の杖との出会いが教えてくれた、内なる力の存在。

だが、もう遅い。声も出せず、指一本動かせない状態では……。

無力さと悔しさで、泣き叫びたい気持ちだった。

瞬間――。

「クレツセントカッター！」

聞き覚えのある少年の声が、なのはの耳に響いた。

三日月状の青白い光の刃が、翼を広げた鳥のように飛来して、彼女たちを拘束する触手を切断する。

三人の少女が薄く水の張られた地面に落ちる前に、その光刃が光輪へと変化した、少女たちを一まとめにして空中に繋ぎ止めた。そのまま光輪はゆつくりと三人を地面に下ろす。

（バインド……？）

色はともかく、見覚えのある光輪に驚くなのはの眼前に、白いマントを羽織る黒衣の剣士が降り立った。

その右手には、蛇を模したサーベルが握られている。

剣士がサーベルの切っ先を地面に突き立てると、青白い魔法陣がなのはたちの足下に浮かび上がる。その魔法陣の外周から、光の膜が立ち上り、ドーム状に少女たちを包み込んだ。

「そこにいろ。すぐに」

振り返りながらそこまで言っただけで、剣士は一瞬言葉を切った。

見開かれた目が、パチパチと素早く瞬いた。

「――すぐに片付ける」

そして改めて言い直すと、怪物に向き直った。

怪物が触手をうねらせ、怒号に似た声を上げる。

「今度は逃がさん」

剣士は逆手に持ち替えたサーベルを地面に突き立てた。金属製の

籠手で覆われた左手を、柄頭に添える。

彼の足下に、魔法陣が発生した。

「メタフィールド、展開！」

魔法陣が剣士を中心に広がっていく。

なのはの視界をまばゆい光が満たし、その光が収まると——そこは陽炎の揺らめく砂漠だった。

「えええええっ!？」

なのはは驚きの声を上げていた。

（あれっ?）

自身の上げたその声で、なのはは身体から痺れが取れている事に気付く。

自分たちは未だ光のドームの中にいる。

（治癒結界……なの?）

その疑問に答えられるであろう者は、サーベルを構えて怪物に立ち向かっていた。

ギラギラと狂暴なまでに照りつく陽射しが怪物の肌を焼き、乾いた熱気はその体から水分を奪っている。

触手の動きも、目に見えて緩慢になっていた。

「クロスファイア……!」

剣士の周囲に、光の玉が十個ほど浮かび上がる。

「シュート!」

その掛け声で、光球は指揮官の号令に従う兵士たちのように一斉に飛び出して、触手を撃ち払う。

「魔導の光よ、混沌を退ける力となりて刃に宿れ!」

剣士の詠唱と共に、サーベルの刃が青白く輝き出した。

触手を撃ち払われ、がら空きとなった本体目掛けて、剣士は跳躍した。

「デイベインスラァーッシュ!」

大上段からの両手斬り。サーベルから伸びた閃光がそのまま巨大な刃となって怪物の身体を一刀両断し、怪物は悲鳴をその場に残し

て、光の粒子となって消滅した。

次いで、周囲の景色が歪み、溶け合い、鉛色のオーロラに変化する。

そのオーロラが消えると、なのはたちは先程の公園に戻っていた。剣士がパチンと指を鳴らす。

結界も光輪も、それを合図にかき消えた。

なのはの身体の痺れは、完全に消え去っていた。

「もう大丈夫だ」

剣士はなのはに語りかける。

「……………」

なのはは知っている。目の前の、自分と同年代の剣士の使う力を。なのはは知っている。かつて自分が奮っていたのと同じ力を操る、この剣士の事を。

「リョウガくん、時空管理局の魔導士なの……？」

おずおずと、なのはは剣士に尋ねた。

「……何でお前が時空管理局を知ってるんだ？」

剣士は思わずそう尋ね返してしまった。

彼の名は、光岡リョウガ。十七歳。私立聖祥大附属高校二年生……
…なのはの、同級生であった。

魔法少女休業中／お話聞かせて

朝の海鳴市。

公園で高町なのはは友人を待っていた。いつもこの公園で落ち合っ
つてから、一緒に登校しているのだ。

「なのは、おっはよー！」

「おはよーさん、なのは」

初丘理紗と三木鞘香の二人が、いつものように挨拶してくる。
とにかく明るくハイテンションな理紗。

サバサバした性格で、時に年齢以上の落ち着きを見せる鞘香。
いつも通りの態度は、昨夜怪物に襲われたとは思えないほどだっ
た。

「おはよう、理紗、鞘香」

その様子に、なのはは安心していった。

「昨日はついてなかったねー、野良犬に追っかけ回されてさあ」
学校へ向かいながら、理紗が話し出す。

「結局遅くなっちゃったけど、でもおかげでそんなに怒られなかつ
たし、良かったじゃん」

そう返したのは鞘香である。

「それにあの後、心配したパパさんが車で送ってくれたしね」

「でも車の中で、やたらと『本当に男はいなかったのか』って聞いて
くるお父さんは、正直怖かったわ…… ありやいつか何かやらかす
よ」

「人聞きの悪い事言わないで」

自分の父親を好き放題言われながら、なのはの口調はどうにも弱
々しい。

父の高町士郎は妻の桃子と共に喫茶店『翠屋』を経営する一方、
古流剣術『御神流』の道場を営み、自身も比類なき剣士である。

その才能と技術は、主になのはの兄と姉に受け継がれているのだ

が、その兄との稽古で、時折このような櫓を飛ばす。

「そんな事でなのはに近付く悪い虫を追い払えるか！」

すると兄も何故か異様に奮起し始めたりするのである。

そんな訳なので、『彼氏が出来ました』などとは、冗談でも口に出さない。父の馬鹿親と紙一重の親馬鹿ぶりに、なのはは思わず溜め息をついた。

「なのははどうだった？」

鞘香がそんな友人に問いかける。

「あれからパパさんに説教されたりとかしてない？」

「ううん、大丈夫」

「なのはのお父さんなら、説教する前に座敷牢に閉じこめてるって座敷牢なんてないもん……」

道場ならあるけど、と胸中で付け加えつつ、容赦ないコメントを繰り出す理紗をじろりと横目で睨むのはだった。

その日の昼休み、私立聖祥大附属高校二年一組の教室に、衝撃が走った。

「リョウガくん、良かったら一緒にお弁当食べよ？」

クラスのマスコットガール高町なのはが、男子を食事に誘ったのだ。しかも相手は、クラスメイト以上の接点はほとんどないはずの、光岡リョウガ……。

しかし衝撃はそれだけではない。更なる驚愕が生徒たちの間に、稲妻の如く駆け巡る。

「ああ」

受けた。

受けたのだ。

この光岡リヨウガなる少年、休み時間は読書にふける物静かな男である。そしてぶっきらぼうな態度で人と接する事も多く、同級生の印象は“文化系硬派”。

その光岡リヨウガが、高町なのはと一緒に弁当なのである。

どこか別の場所で食べるのか、肩を並べて教室を出る二人の背中に、生徒たちの視線が一斉集中していた。

クラスメートの動揺など露ほども気付かず、なのはとりヨウガは屋上に出た。

二人以外にも、見晴らしの良いこの場所でランチタイムを過ごしている生徒がちらほらと見受けられる。

なのははフェンスのそばの空いたスペースにシートを敷き、そこに座った。リヨウガもその隣に座り、弁当を開ける。

最初はお互い、黙々と食べるだけだったが、なのはの方から話し掛けてきた。

「昨日は、ありがとう。助けてくれて」

「それが仕事だからな」

「うん……でも、何で二人の記憶を操作したの？」

「ここは管理外世界で、魔法はフィクションの中だけの存在だ。無闇に知られる訳にはいかない。野良犬に追い回されたって事にしないと方が、あいつらも災難だと思ってサッサと忘れてくれるだろ」

「そっか、そうだね……」

今朝の友人二人との会話を思い出して、なのはとりあえず納得した。

現に彼女たちは、特にこたえた様子もなく、逆に帰りが遅くなった言い訳になってラッキーくらいに思っていた。

それどころか放課後になったら、その件を理由にまた遊びに行こうと言い出しかねないだろう。

その様を想像したら、なのはは何やら可笑しくなってきた。

「他に聞きたい事はあるか？」

リヨウガはおかずのワインナーを口に運びながら、尋ねる。

「んつと、リヨウガくんは何か事件を追ってこの世界に来たの？」

質問してから、なのはは周りを見渡した。

自分たちの会話を聞かれてはいないだろうか？

「心配すんな」

リヨウガは水筒のお茶を一口飲んでから、言った。

「不可視の結界を張ってある。外からの音は入ってくるが、中からの音は結界の外には出ない」

「そ、そうなんだ……」

ホウツとなのはは感心の息を漏らした。自分の本来の用件——リヨウガについて色々と聞きたいという事を覚って、食事を始めた時にでも張っておいたのだろう。

「ありがとう、リヨウガくん」

「ん？」

「実は私、中学に上がる前に魔導士をお休みしちゃって、念話とかもろくに使ってなかったから、ちよつと自信なくって……」

「だろうな。でなきゃあ授業中にでも念話で語りかけてきたはずだからな」

そこまで見透かされて、なのははニヤハハ……と苦笑い。

「で、さっきの質問なんだけど……」

「ああ……特異点の警備」

「とくいてん？」

聞き慣れぬ単語に、まるで初めて見る玩具を前にした子猫のように、なのはは小首を傾げた。

「太陽の公転周期にズレがあつて、それが積み重なり、四年に一度余分な一日が生まれるように、因果律にもそういうズレが発生する。そのズレの集束点を特異点と呼んでる」

「いんがりっ？」

「物事の結果には、必ずその原因があるっていう法則みたいなものだ。その法則の歪みやズレが、時期と共に積み重なって一つの場所、一つの物、時には一つの生き物に宿る事がある」

なのはリヨウガの説明を、食べる手を止めてジツと聞く。

「その特異点の周辺では、今言った因果律が乱れる事がある……何も無い場合もあるがな」

「それって変だよ。原因と結果が歪むのが特異点……なんだよね？」
言ってる途中で、自分の理解が間違ってるのか不安になって、なのはの言葉は結局質問になってしまった。

「そうだ。その特異点で何も起きない……これも立派な、因果律の歪みだ」

「それって屁理屈なの」

「でも実際、そういうもんらしいぜ」

しかしまだ納得いかないのか、なのははムスツと唇を尖らせた。

「とにかく、そういう訳で特異点やその周辺では事件が起きやすい。それらを秘密裏に、なるべく事前に処理して、平穩を保つ。すると因果律の修正力が働いて、特異点は自然消滅するって寸法だ」

「それって、どれくらいかかるの？」

「さあな……短けりや一週間もかからないが、長い時には何世代も警備する必要があるらしい」

「で、この街にその特異点があつて、その平穩を守るのが」

「ガーディアン……時空管理局が俺に課した使命だ」

「……………」

なのはは不意に、暗い顔になった。

「どうした？」

「ん……リヨウガくん、いつからそのガーディアンのお仕事始めたの？」

「この世界に来たのは、今年に入ってからだな」

「最悪、リヨウガくんの孫の代になっても、そのお仕事が終わらないかも知れないんだよね？」

「そうなる場合もあるっただけの話だ。まだわからん」

「でも、いつ終わるかもわからない戦いなんて、私は、何だかいやだな……」

「だからお前は、魔導士をやめたんだろ？」

「え？」

「お前が元管理局の囑託魔導士だつてんで、昨日帰ってからデータベースにアクセスしてお前の名前を探した。ジュエルシード事件や闇の書事件を解決したんだつてな」

「うん……でも、戦う事にしか魔法の力を使えないのが、いやになったの」

「俺も、あまり好きじゃない」

「リヨウガくんも？」

「銃とナイフがあれば足りる事に魔法の力を使うなんざ馬鹿げてる。ただ、魔法の力が銃やナイフより有効な時があるのも事実だ」

「うん……」

「気にするな。お前は今まで通り、普通に暮らしていけ。それも特異点の平穏を守る大事な仕事だ」

リヨウガは弁当を包むと、立ち上がった。

「その分、俺の任期が縮まるかも知れない。俺の事を心配するなら、そうやって手伝ってくれよ」

「普通に暮らす……本当にそれで良いのかな……」

「良いも何も、お前だって魔導士やってた時に身に染みたまはらずだぜ？」

リヨウガは屈んで、なのはの顔を覗き込んだ。

「普通に暮らすってのは、案外難しいもんだつてな」

「あうっ」

魔法少女だった頃を思い出して、なのはは納得してしまった。

魔法やそれに関わる存在を知らないようにしなければならず、親兄弟や当時の友人にすら秘密にしておかねばならなかったのだ――結局バレたが。

「じゃ、先に教室に戻る」

リヨウガはなのはを残して、立ち去る。

「……………」

なのはは、少年の背中を黙って見送った。

短い時間の会話だったが、ただの同級生から一気に距離が縮まったような気がした。

だからこそ、何か手伝いがしたい。

（でも、レイジングハートは管理局に預けちゃってるし…………）

仮にあの金色の魔法杖があったとしても、昨夜の体たらくでは、かえってリヨウガの足を引っ張るかも知れない。

ハア…………。

ネガティブな気持ちに胸を満たされて、なのはは溜め息をついた。

「じゃあ、本当に一緒に食べてただけ？」

二年一組の教室で、理紗は携帯電話で話をしていた。

相手は三組の中島銀河。よく一年生の妹と一緒に、屋上で弁当を食べているので、メールで様子を見るように頼んでおいたのだ。

先程戻ってきたリヨウガは、一緒に弁当を食べただけの一点張り。そこで銀河に電話で聞いてみたが、彼女の報告も同じ内容で、肩透かしも甚だしいものであった。

『食べてただけっていうか、一応何かお喋りしてたっばいけど、何て言ってるのかは聞こえなかったわよ？』

「告白は？ キスは？ 抱き締めたり、押し倒したりとかは？」

『…………あんた、ここが学校だって事忘れてるでしょ』

「うつ…………まあ、何だかんだ言っても、なのはにはまだ早かったって事よね！」

『……あなた、高町さんが先に彼氏作った訳じゃなさそうだから安心してるわね?』

「な、何言ってるのよ。私はいつだってなのはを応援してるわよ?」
わずかに声を上擦らせる理紗。

『でも高町さん、何か元気なさそうだったのよね。ふられたって感じでもなかったけど、それとなく慰めてあげて?』

「りょーかい。ありがとね、銀河♪」

『どういたしまして』

会話を終えると、ちようどなのはが教室に戻ってきた。
なるほど、言われてみればその顔はわずかに暗い。

「な〜のは♪」

「わひゃっ!?!」

自分の席に着こうとしたところを背後から抱きつかれ、なのはは奇声を上げた。

「ちよつと理紗、何するの!?!」

「なのは〜、今日はめいっぱい遊ぼうね〜!」

「今日はって言うか、今日もの間違いじゃ……ひゃんっ!」

「このけしからん胸の中に溜め込んでるもの、全部吐き出しちゃうね〜。私はいつだってなのはの味方だよ〜♪」

「だったら変なところ触るのやめて〜!」

「あなた、大勢さんの前で何やってんのよ!」

そこに鞘香が怒鳴り込む。

窓際の席で読書にいそしんでいたリョウガが、そんなドタバタを横目で見ていた。

魔法少女休業中／悪意の胎動

高層ビルの如き巨木が所狭しとそびえ立つ、鬱蒼とした森。もしも誰かが、その幹を伝って下へと目線をやったとしても、その根本は遥か下方の暗がり消えていて、確認する事は出来ないだろう。

風を巻き起こして、鯨を思わせる巨大な鳥が、その木々の間を何かから逃げるように飛んでいた。

鳥とは言っても、その翼は四枚あり、一本一本がそのまま刀剣として使えそうな鋭い爪を生やした脚もまた四本あり、獣にも似たシルエツトだ。

巨体を高速で飛翔させるたくましい翼は、明らかにこの森の中を飛ぶのには適していなかった。何度も巨木の枝や幹にぶつけて、ポロボロに傷ついていた。

それでも巨鳥は飛び続けた。

その彼を追い立てるのは、白いマントを風にはためかせる黒衣の剣士。巨鳥にとっては飛びづらい森の中も、少年にとっては高速飛行が充分可能であった。木々の間をすべらかにぐり抜けて、徐々に距離を詰めていく。

「クロスファイア……」

少年——光岡リョウガの周囲に、青白く光る球体が五つ発生した。
「シュート！」

その号令と共に、光球は意志を持つかのように木々の間をすり抜けながら、一つ一つが獲物に飛びかかる猛禽のように巨鳥へ迫る。

「炎熱変換！」

目標に炸裂する寸前、光球が一瞬、光の円環に包まれた。次いで光球が巨鳥の体に命中すると、爆発が起きる。野球ボールほどのその大きさからは想像し難い大爆発で、巨鳥の翼は更に傷付き、最早巨体を浮かせる力すら失いつつあった。

リョウガは標的に向けて、金属製の籠手をはめた左手をかざした。

青白く光る魔法陣が発生し、その前面に、かき集められるかのよう
に光の粒子が発生し圧縮されていく。サッカーボールほどの大きさに
までなった光球の更に前面に、二つの光輪が浮かび上がった。

一つは加速、もう一つは炎熱属性付与の魔法効果がある。

「バーストキャノン、ファイア！」

光球は二つの光輪をくぐり抜けると、一気に加速して巨鳥に命中、
大爆発を起こして標的を消滅させた。

戦いが終わると、森が消えていく。

完全に森が消え去ると、そこは海鳴市を眼下に見渡せる、空の上
だった。

メタフィールド。

効果範囲内のロケーションを術者が任意に設定出来る、結界魔法
である。気温、湿度、地形や広さ、果ては時間の流れる速さまで、
自在に変えられる。

リヨウガは、敵が広い空間を飛ぶのを得意とする事を見抜き、障
害物の多い『森』というロケーションを選択して、メタフィールド
を展開させていたのである。

青空を緩やかに駆け抜ける風は、高度のせいかなやや冷たい。それ
が、汗のにじんだ額に心地良かった。

リヨウガは遠隔視の魔法で、足下に広がる街を見つめる。

日曜の街を行き交う人々は、頭上で魔導士と怪鳥との戦いがあつ
たなどとは、少しも気付いていない。

それで良い。

リヨウガは安堵の気持ちで、知らず笑みを浮かべた。

しかしその笑みをすぐに打ち消す。

「大蛇、記録したか？」
おろち

すると、サーベルの柄尻にはめ込まれた宝玉が煌めき、電子音声
で答えた。

《Yes》

「なら良い」

リヨウガはマントをはためかせ、その場から飛び去った。
人気のない森の中に着陸したリヨウガは、白いマントと黒衣からなるバリアジャケットを解除して私服姿に戻った。

手にしていたサーベル、アームドデバイス『大蛇』は、サーベルから蛇が絡みついた青い宝玉のペンダントに姿を変える。

それを首にかけたリヨウガは、森を出て自宅へ向かった。

海鳴駅前のマンションの五階が、その自宅である。

エレベーターで上って廊下に出たところで、リヨウガは足を止めた。

「あ、リヨウガくん。お帰りなさい」

部屋の前で、バスケットを手に提げたなのはが立っていたのだ。

「何やってんだ、お前」

「んと、この前助けてくれたお礼に、ケーキを作ってきたの」

「俺の家を、何で知ってるんだ？」

「委員長に聞いたら教えてくれたよ？」

「……とりあえず入れ」

ズボンのポケットから鍵を取り出して玄関のドアを開け、リヨウガはなのはを招き入れた。

なのはは「お邪魔します」と会釈してから、玄関をくぐる。

「リヨウガくん、一人暮らしなの？」

「姉貴もいる。今は調べ物頼んで、出かけてるがな」

答えながら、リヨウガはリビングへなのはを案内し、自分はキッチンでコーヒーを入れてくる。

「調べ物って？」

「お前には関係ない」

「ガーディアンのお仕事なんですよ？」

「……まあな」

「なら、私にだって関係あるよ。リヨウガくんのお仕事はこの街を

守る事で、私はこの街に住んでるんだから」

「……………」

リヨウガは軽く唇を尖らせた。

が、それはすぐに戻して、リビングのテーブルにコーヒーを置く。そして、そのテーブルを挟んでなのはと向かい合うように、ソファに腰を下ろした。

「知ってどうするんだ。念話も使える自信がないくらいブランクがあるくせに、手伝うとも言うつもりか？」

「うつ……………」

どうやらその通りだったらしい。凶星を突かれて、なのはは言葉に詰まる。

「た、戦う以外のお手伝いなら、出来ると思うんだけど……………」

「ダメだ」

リヨウガはピシヤリと言い放つ。

「囑託魔導士ですらなくなったお前に仕事を手伝わせたら、俺の給料査定に響く」

「じゃあ、お姉さんは？」

「問題ない。うちはみんな管理局の局員で、姉貴は俺の補佐役だ」
「むうゝっ！」

「……………だいたいお前、お礼のケーキを持って来たんじゃないのか？」
「か？」

頬を膨らませるなのに対して、リヨウガは強引に話題を変えてきた。

「そのお礼の品も見せないうちから、他人様の仕事にあーだこーだ口出しするのが、お前ん家のならわしなのか？」

「あう……………ごめんなさい」

なのはは言われて、バスケットから三種類のショートケーキを出して、テーブルに並べる。

「私の家、翠屋っていう喫茶店やってて、お母さんがパティシエやってるの」

「そのお袋さんが作ったのか」

「ううん、私だよ？」

「ふーん」

リヨウガは添えられていた小さなフォークで、ケーキの端を切って一口食べた。

「……翠屋つつったか？」

「うん」

「姉貴は多分、お前んとこの客だ」

「そうなの！？」

「姉貴がたまに買って帰るケーキに、味が似てる」

「本当！？」

なのはいきなり身を乗り出した。

母の桃子は、彼女のパティシエの師匠でもある。その母の味に似てるというのは、なのはにとってはこの上ない賞賛だった。

「姉貴が買ってくる、お袋さんのケーキの方が全然美味いかな」

「あうっ……」

リヨウガの言葉に、なのははうなだれた。

もともと、簡単に母の味に追いつけるなどとは露ほども思っていないが、改めて遠い道のであると思ひ知らされる。

「お前が作ったのも、充分美味いかな」

「ありがと……でもこの道に關してだけは、慰めはいらないの……」
「……ケーキ食わせてくれたお礼に、一つだけ教えてやる」

口調はぶっきらぼうだが、心なしかリヨウガの声は柔らかくなっていた。

「この街には、違法魔導士が潜んでる」

「魔導士？」

「怪物を召喚し、時にはそいつに有利な結界を作り上げる事が出来る魔導士だ」

その言葉に、なのはは先週自分たちを襲った怪物の事を思い出した。

あの時自分たちは、水溜まりを出入り口とした別の空間に引きずり込まれた。

「怪物がそういう能力を持つてるとかじゃないんだ……」

「それなら俺のメタフィールド……結界に閉じ込められたりはしない。それが何の前触れもなしにこの街に現れる以上、誰かが奴等をこの世界、この街に召喚してるって事だ。友達を守りたかったら、魔力反応に注意して、結界の気配に気付いたら引きずり込まれる前にダッシュで逃げろ」

「う、うん……」

なのはは不安げにうなずいた。

「教えてくれてありがとう、リョウガくん」

「……ケーキの礼だ。もつともこの味じゃあ、それ以上の情報は教えられんがな」

「じゃあ、もつと美味しい物作れるようになったら、もつと色々教えてくれるの？」

「……考えといてやる。作れるようになったら、な」

「うん！ 私頑張る！」

がぜん元気になるなのはを見て、リョウガは自分が余計な事を言ってしまったのではないかと、ちよつとだけ後悔した。

なのはが帰った後、リョウガは自分の部屋へ行き、通信端末を起動させた。

アームドデバイス『大蛇』に記録させた怪鳥の映像をその端末に送り込み、時空管理局のデータベース内にある各次元世界の生物と照らし合わせる。

似た特徴を持つ生物が複数表示されるが、どれも一致しない。

「やっぱり、か」

リョウガはポツリとつぶやいた。

彼がガーディアンとしてこの街にやって来てから、何度かこの世界には存在しない筈の怪物と戦った。

どこか別の次元世界と繋がる次元ゲートのような物が出来てるのか。

もしそうなら怪物の外観や特徴から、その世界を特定出来るかも知れない。

だが実際に調べても、結果は先程の通りだ。

似た特徴を持つ生物が複数表示されるという事は、逆に言えば……、

「この街に現れる怪物は、複数の生物を掛け合わせて造られた可能性があるって事で……当然それを造った奴がいる……」

しかし、それが怪物を召喚している人物と同じなのか否かは、わからない。

「……………」

リョウガはガシガシと頭を掻いて、傍らに持ち込んでいたショートケーキを一口食べる。

なのはが彼のために作ってくれたケーキ。

自分の批評に一喜一憂するなのはの顔が、思い浮かんだ。

「どういう事かしらあ？」

闇の中に、女の声が響く。

白いケーキをまとった女。

二つに分けた茶色い髪の先端を結び、顔には大きめの丸眼鏡をかけたあどけない感じだ。

しかしケーキの下ボディースーツが描くボディラインは、挑発的なほど肉感のある曲線美だった。

「せっかく預けたバトルキメラの運用データが、全く取れていないんだけどお？」

女の蔑むような声を、痩せた男が背中で聞いていた。

「管理局が動いている」

目を銀色の仮面で隠したその男は、ただ一言そう答えた。

「それをどうにかするのも、あなたのお仕事ではなかったかしらあ？」

「……わかっている」

「なら、サツサとどうにかしてくださいな。うちの怖いお姉様が怒る前に」

「わかっている」

女の口調にいらついたのか、男の声が若干荒くなった。

「相手はガーディアン。だが、まだ若造だ。任せておけ」

「せいぜい期待させていただきますわぁ」

女はおどけた態度を崩さぬまま、闇の中に溶け込むように姿を消した。

「……人形風情が」

残された男は、小さく、しかしいらだたしげにつぶやいた。

迷宮ハイスクール／忍び寄る影

私立聖祥大附属高校。

グラウンドでは二年一組が体育の授業をやっている。

クラスメート等の見守る中、なのはは緊張の面持ちで立っていた。目の前には、走り高跳びのバーと、分厚いマット。

体育教師の猿渡剛が『ピッ!』とホイッスルを鳴らすと、なのははダッと走り出す。

バーが目前に迫ってくる。高さは一メートルちょうど。

一際強く地面を蹴りつつ、身体を真横に倒して跳ぶ。

ボッフ

自分の身体がマットに落ちたのを知ったなのはは、すぐさま顔を上げた。

バーは……落ちてはいない。

「やったあーっ! 記録更新なのおーっ!」

「いや、跳んでないぞ高町」

はしゃぐなのはに、猿渡のツツコミが入る。

「……へ?」

「なのは、あんたバーの下くぐってたわよ?」

三木鞘香が呆れた声で教えてくれた。

「なんかアクション映画みたいな動きだったね」

その隣で昀丘理紗がケラケラ笑い、つられた何人かの女子も、彼女をたしなめつつクスクスと笑っている。

「まあ、記録更新にはなったんじゃない? 違う意味で」

「えええええっ!」

自分一人だけのぬか喜びと知ったなのはは、理紗のトドメの一撃にも近い一言に、耳まで真っ赤になった。

「高町。後でもう一回跳ばせてやるから、とりあえずどけ。な？」
「はい……」

しょぼくれたまま、マットの上から下りるなのはであった。
そんな彼女の様子を、グラウンドを見渡せる教室の窓から眺める
者がいる事には、当然気付く筈もなかった。

昼休み。

なのはは友人二人と机を合わせて、弁当を食べていた。しかし、
先程の体育での失態が堪えたのか、箸が進んでいない。

そこへ、金髪の少女がやって来る。気の強そうな顔立ちは、どこ
かしら猫のようであった。それも血統書付きの。

「あ、アリサちゃん」

「見てたわよ、なのは」

自分に気付いたなのはに対して、眉を吊り上げて詰め寄る彼女は、
アリサ・バニングス。高校に上がってからは交流の減った、なのは
の友人の一人だ。

「見てたって……」

なのはの笑顔が、引きつった。

「どうやったらバーの下をくぐるなんていう逆ウルトラCが出来る
訳！？」

「それは言わないでええー！」

なのはは恥ずかしさからバツとうつ伏せになった。

「すずかだって跳べたのに、あんたが跳べないってのはどういう了
見なのよ！」

「もうこの学校の伝説になっちゃうだろうね」

「友人として、そんな伝説はノーサンキューよ！」

思い出してまたケラケラ笑い出す理紗に、アリサは返す。

「私は尚更ノーサンキューなのっ！」

「という訳で、学校終わったらなのはを慰めてあげようと思うんだけど、一緒にどう？」

鞘香がなのはの頭を撫でてやりながら、アリサに尋ねた。

「ごめん……今日も習い事がギッシリなのよ」

答えるアリサの声が、暗くなった。

『習い事』そのものは、決して嫌ではない。むしろ楽しいと思うっている。

だがそれとは別に、そのせいで仲の良かった友達と一緒に過ごす時間が激減した事には、不満を感じる。彼女たちに対して、申し訳ないとすらアリサは思っていた。

今わざわざここに足を運んだのも、少しでもなのはと言葉を交わしたいという気持ちがあったからである。

「お嬢様は大変よね」

「仕方ないわ、生まれる家は選べないしね」

「息詰まったりしない？」

「……まあ、ちょっと肩くらいは凝るかしら」

理紗の言葉に、アリサは大袈裟に肩を回してみせた。

「それでは僭越ながら、私がアリサお嬢様の肩揉みをば」

「あんたにやらせたら変なところ触るでしょっ！」

「へへ、あんたの『ここ』は変なところなんだ」「言ってるそばから触るなっ！」

「ちよつと、あんまり騒ぐと、みんなの迷惑だよ……？」

目の前で漫才を始めた友人たちをたしなめながらも、なのははどことなく懐かしい気持ちになっていた。

別棟の屋上から、そんな彼女をじっと見つめる者がいた。

放課後。

ゲームセンターから、なのはたちが出て来た。

なのはは、白い小さなぬいぐるみを抱いている。パツと見は猫のようだが、耳からウサギ耳を思わせる長い毛が伸び、太くフサフサした尻尾は体と同じくらい大きい。

なのはの為に、理紗がクレーンゲームで取ってくれた物だった。

「ありがとう、理紗」

なのはは嬉しそうにそのぬいぐるみに頬ずりする。

「ずっと前からほしかったんだ、このクウベエ人形」

「お安い御用よ。『クレーンゲームの黒い衝撃波』の二つ名は伊達じゃないわ」

「あれ？ 『テトリスの白い女王』じゃなかったっけ？」

鞘香が思い出したようにつぶやく。

「気にしない気にしない♪」

「いや、あんたはもつと色々気にするべきだと思うよ……特に周りの評価とか」

「え、何それ」

「冗談抜きで、あんたレズ疑惑立ってるらしいのよね」

「なんで！？ って言うかどこ情報！？」

「委員長がそれとなく教えてくれたわ」

「くうっ！ あの冷血女、明日揉み倒してやるうっつ！」

学級委員長・帆村曉美のポーカーフェイスを思い出しながら、理紗は指をワキワキ動かす。

「……そんなんだから、疑われるんですよ。おかげで、ほら」

鞘香がピツと指差した先には、電柱がある。

理紗と、つられたなのはがそちらへ視線をやると、その電柱の陰にサツと隠れる者があった。

「早くも百合の花園からお迎えが来てるみたいねえ」

「あ、あははは……」

さすがの理紗も、軽く身の危険を感じたのか引きつった笑みを浮かべる。

「あー、えーっと、アレをナニするの忘れてたから、あたし今日は

もう帰るわ！　じゃあね〜！」

理紗は言うなり、二人の返事も待たず駆け出していく。

「……おどかしすぎたかな」

「たぶん」

その狼狽ぶりに、ちよつと罪悪感を覚えた鞘香であった。

鞘香と別れ、なのはが一人家路についた時だった。

「あ、あの！」

不意に後ろから声をかけられた。

ビクツとしたなのはが振り向けば、そこには同じ学校の制服を着た、ショートヘアの少女がいた。

なのはは、その顔立ちに見覚えがあった。

「えーっと……」

「わ、私、一年四組の、なかじますばる中島昴すばるっていいいます！　この前、図書室で、その……」

「ああ、あの時の」

言われてなのはは、二重の意味で思い出した。

以前図書室に本を借りに行った時、古くなつた棚が崩れて、並べあつた本が床に散らばる騒ぎが起きた。その時、図書委員でもないのにその本をせっせと片付けていたのがこの少女である。

なのはもそれを手伝い、怪我はなかったか気遣つてやりもした。

見覚えがあつた理由がもう一つ。

この中島昴、二年三組の中島銀河の妹なのだ。

「ひよつとして、さっき私たちの事を見てたのって……」

「私です、ごめんなさい！」

昴はペコペコと頭を下げる。

「あの時のお礼がなかなか言う機会がなくて、今日こそは言おうと思つたけどお友達と一緒にのところを邪魔しちゃ悪いかなどか思つて

たら、なかなか言い出せなくて……！」

何度も頭を下げながら、しどろもどろに説明する昴を見て、なのははおかしくなった。

鞘香の戯れ言を真に受けて、逃げるように帰った理紗が、だ。

「気にしなくて良いよ。困った時はお互い様だし、後輩の面倒を見るのが先輩のお仕事だもんね」

なのはは優しく昴に話しかける。

「良かったら今度お姉さんも誘って、みんなで遊ぼうよ。ね？」

「は、はい！」

緊張しているのか、昴の返事は途中で声が裏返ってしまった。

そんな後輩を愛らしく思った瞬間、なのはは空気が変わった事に気付いた。

周囲の空気に、何か別の物が混じり込んだような感覚。

そして、その混じり込んだ何かの密度が、どんどん高くなっているのが感じられた。

魔力反応に注意して、結界の気配を感じたら引きずり込まれる前にダッシュで逃げる。

リョウガの忠告が脳裏をよぎった瞬間、なのはは昴の手を掴んで走り出していた。

「え！？ ええっ！？」

昴の困惑する声が聞こえたが、気にしてる暇はない。逃げ切れたら、その時適当にごまかせば良い。

さっきまで晴れやかな夕暮れだったのに、背後から霧が広がって来た。「た、高町さん、あの！」

「良いから走って！」

思わず怒鳴ってしまった。

結界に閉じ込められ、そこで怪物に遭遇したら、今の自分ではどうしようもない。リョウガが、昔のテレビや漫画のヒーローのよう

に都合良く間に合ってくれるとは限らないのだ。

霧が、意志を持っているかのようになのはたちの前に回り込む。構わずその霧の中を突っ切ると……、

「嘘……でしょ……？」

眼前の風景に、なのはは立ち止まってしまふ。

二人は、学校の廊下にいた。

「高町さん……これ、どうなってるんですか？」

昴も突然の事で声が震えていた。

「だ、大丈夫！ 私が一緒にいるから、大丈夫だよ！？」

なのはの声もかすかに上擦っていた。

だが、怖がってはられない。今彼女を守れるのは自分だけなのだ。

（この子を安全な所まで連れて行かなきゃ……！）

そう自分に言い聞かせる。

「私の手、絶対離しちゃダメだよ？」

「は、はい」

二人はしっかりと手を繋ぎ合い、歩き出した。

校舎内はいたって静かで、なのはが『ひよつとしたら自分の耳がおかしくなったのではないか』と疑ってしまうほどだった。

これだけ静かなら、部活にいそむ生徒の声が聞こえてきても良い筈だが、それすら聞こえないという事は……、

（ここはリヨウガくんが言っていた、違法魔導士の結界の中、なのかな……？）

だとすれば、最早自力での脱出は不可能だ。

（リヨウガくんが助けに来るのを待つしかない……）

幸か不幸か、結界内は本物の学校と広さも構造も同じのようだ。

怪物が現れても、隠れてやり過ごす場所を簡単に見つけられるだろう。

自分たちが既に敵の腹中に吞まれたも同然の筈だとわかってはいたが、なのはは今はそう考えて、不安や恐怖を追い払った。

廊下の角を曲がると、向こう側からも二人歩いて来る者がいた。自分たちだった。

まるで鏡に写したように、そっくりだった。ご丁寧に、なのはが片手で鞆ごと抱えているクウベエ人形まで同じだ。

そう、正に鏡写しである。現になのはの頭のサイドテールが、こちらが左側なのに対して、相手は右側にあった。

その鏡像の自分たちが、持っていた物を床に放る。

そして、ブレザーを脱ぎ捨て、シャツのボタンを外し出す。

その顔には恥じらいではなく、冷たい邪悪な笑みが浮かんていた。ボタンを外して、二人がシャツを大きく開くと、その合わせ目から鱗に覆われた指が現れた。

ナイフのような爪を持つ指が、窓の隙間に手をかけて一気に開けるように、内側から二人の体を引き裂く。

そして現れたのは、爬虫類と人間を掛け合わせたような姿の、四本腕の怪物だった。

二匹の怪物の、濁った黄色の眼がこちらを向いた瞬間、なのはは昂を後ろに突き飛ばしていた。

「逃げて！」

そう叫ぶのと、怪物の一匹が自分の上にのしかかったのは、ほぼ同時。

イグアナに似た顔が、ギザギザの歯を剥き出しにして眼前に迫る。二本の腕で両腕を押さえ込まれ、もう二本で頭をガッチリと掴まれ、なのはは身動きが取れなかった。

昂の悲鳴が聞こえた。もう一匹に捕まったのだろう。

味見のつもりなのか、怪物の長く厚みのある舌が、なのはの首筋や頬を舐める。粘り気のある唾液が、少女の肌を汚した。

思わず閉じた目に、涙が浮かぶ。

瞬間、自分の上を熱風が駆け抜けたと思うと、不意に怪物の体が軽くなった。

「……………」

目を開けたなのはは、怪物の上半身が自分の腕と頭を押さえつけた手首を残して切断され、床に崩れ落ちるのを見た。

起き上がり、昴の方を向く。

自分と同じように押さえ込まれていた昴。彼女の上の怪物も、同じように上半身を切断されていた。

「大丈夫か？」

蛇身を模したサーベルを携えた剣士が、そこにいた。

「リョウガくん……！」

黒衣の上から白いマントを羽織るリョウガの姿が、窓から差し込む夕陽の中でなのはには眩しく見えた。

迷宮ハイスクール／鏡写しの刺客

夕陽で朱に染まる教室。

椅子に座る中島昴の右足首を、床にしゃがんだ光岡リヨウガが手に取っている。高町なのはは二人の様子を、すぐそばで心配そうに見つめていた。

四本腕の怪物に押し倒された際に、彼女は足首を捻ったらしく、リヨウガが魔法で治癒させているところである。

かざされた右手から溢れ出る絹のような柔らかな光に包まれ、昴の捻挫は十秒ほどで完治した。

「あ、ありがとうございます」

昴が恐る恐ると言った風に礼を言う。リヨウガはただ「ああ」と返すのみだった。

それがこの少年の普段の態度なので、なのはは特に気にしなかったが、昴は違った。

本物の刀を携え、怪物を瞬く間に葬り去る力と、そしてその逆に怪我をたちまちの内に治してしまう力を持つ者……別の世界からの来訪者のように思えて、それが何やら不気味だった。立ち上がり、なのはのそばにピッタリとくっつく。

「大丈夫。私の友達なの」

リヨウガを怖がっていると感づいたなのはが、そう言って昴を安心させようとする。

リヨウガはその『友達』というフレーズを否定しようとした。ただの一同級生に過ぎず、友達と言うほどの付き合いではない。が、何か面倒くさそうな気がしたので、やめにした。

「リヨウガくん。どうしてここに？」

なのはのその質問に、リヨウガは一瞬の間を置いてから答えた。「俺も、敵の結界に引き込まれた」

その返答に、昴は当然チンプンカンプンだったが、なのはは背筋

を舐め上げられるようなゾクリとしたものを感じた。

「帰り道に怪物に襲われてな。メタフィールドに引きずり込んでから倒したんだが、フィールドを解除したらここにいた」

リヨウガはそこまで言っつて、また一瞬の間を置く。さっきもそうだった、言うべきかそうでないかを考えてるのだろう。

「結界の上から他者が別の結界を張ると、結界同士が干渉するから術者はすぐにそうとわかる。しかし、俺にそれを覚られずにやらかす辺り、敵はかなりの腕前だな」

「じゃあ、脱出する方法は……」

「それを今から調べるんだよ」

リヨウガは手にしていたアームデバイス『大蛇^{おろち}』の切っ先で、壁にかけてある時計を示す。

なのはと昂がそちらに目をやった。

時計の針は六時十分の位置にある——ように見えたが、

「反対になってる……」

なのはが言った通り、時計の数字が鏡に写したように左右反転していた。つまり実際の時刻は、五時五十分くらいという事になる。

「学校内のロケーションを丸ごと、左右反転の状態で結界内に構築してある。加えて、さっきの連中のように、複数の怪物を偽装して結界内に解き放つてある。ちよつとしたダンジョンだな——だが」

リヨウガの声に、不安の陰りはなかった。

「これだけの結界を自前の魔力で構築・維持するのは難しい。どこかに、この結界の動力源の役割を果たす中心核がある筈だ。それを破壊すれば、結界も消える」

「じゃあ、手分けして」

「ダメだ」

なのはの言葉を、リヨウガはピシヤリと遮った。

「手の込みようからしてこの結界は、俺を倒すための物と見た。それに巻き込まれたお前等を働かせるつもりはない」

「そんな事言ってる場合じゃないよ。中島さんだけでも、帰してあ

げなきゃ」

「……どの道、戦う手段のないお前等をウロチヨロさせられるかよ」
「あう」

結局そこに行きついた。

「そういう訳だから、俺にピッタリくっついて来い。良いな？」

「うん」

「は、はい……」

二人の返事を聞いたリョウガは教室を出ようとして、足を止めた。出入り口の戸が閉まっている。開け放しにしてあった筈だが……。
「うひゃっ!？」

昴の素っ頓狂な声が背後で上がった。

「な、何かが私のお尻を舐めた!」

——チッ!

リョウガは思わず舌打ちした。無人の教室と安心した自身の判断の甘さに、怒りすら覚える。

「俺の背後に回れ!」

言いながら、魔法術式の構築を始める。

なのはと昴が彼の後ろに隠れるのと同時に、並んでいた机や椅子が生き物のように動き出した。いや、それは生き物だった。外観がグニヤリと歪み、四つ足で床を這い回る爬虫類に似た怪物に変わっていく。

「プロテクション・サークル!」

リョウガの詠唱によって発動した防御結界が、三人を包む。

間髪入れず、リョウガは大蛇を逆手に持ち替え、次の魔法を起動させた。

「クリスタル・コフィン!」

掲げた蛇頭の宝玉が煌めき、青白い光波が教室を満たす。次の瞬間には、周囲の怪物たちはことごとく凍りついていた。

床や天井、窓ガラスにいたるまで、リョウガの張った防御結界の外にある全てが、氷に覆われていた。

「凄い……」

なのはが思わず、感嘆の声を漏らす。

「あの、ドアも凍ってますけど……」

昴の指摘に、リヨウガはその凍りついたドアに向けて、籠手に覆われた左手をかざす。

青白く光る魔法陣が左手に出現した。

「グレネードショット」

魔法陣から放たれた光球が、凍りついたドアを爆破した。

「行くぞ」

リヨウガは何事もなかったかのような足取りで、廊下に出る。

なのはと昴も後に続いた。凍った床は、靴の裏側が凍ってくっつくため滑る事がない。二人はすぐに廊下に出る事が出来た。

「リヨウガくん、変換資質持つてるんだね」

廊下を歩きながら、なのははリヨウガに声をかける。

「ん？」

「ほら、さっきのあの魔法……」

「あれは資質じゃない。技術だ。魔力変換にちよつとアレンジを加えれば——程度に差はあるが、誰でも出来る」

「そうなんだ……私にも出来るかな？」

「無理だ」

「——今誰でも出来るって」

「走り高跳びでバーの下をくぐるなんて逆ウルトラCかます奴には無理だ」

「それは言わないで……」

昼間の失態を思い出して、うなだれてしまうのはであった。

「あの、どこに行くんですか？」

昴がなのはの背中越しに、リヨウガに尋ねた。

「屋上だ。そこから校舎全体に魔力探知魔法をかけて、中心核の位置を探る」

リヨウガは答えながら、突き当たりを左に曲がった。

「リヨウガくん、逆だよ？」

「そっちは実習棟ですよ？」

「良いんだよ、鏡写しなんだから」

なのはと昴の指摘に、リヨウガはそう答えた。

実際、少し進むと上の階に続く階段が見えてきた。

「ほらな」

後ろの二人を一瞥して、リヨウガは階段を上り始めた。

「この調子なら、すぐに脱出出来そうだね」

左右反転した校舎内を迷わず歩くリヨウガに、なのはは頼もしさを感じていた。昴もウンウンとうなずく。

「女の子に頼りにされるのは悪い気分じゃあないが」

リヨウガはポツリと、やや重い声を出した。

「余り樂觀的すぎるのは良くないぞ。不安がらせるつもりはないが、状況は正確に把握しないと……俺たちはまだ、敵の腹の中にも同然なんだ」

「う、うん。わかってる」

「ただし、これだけは言っておく」

リヨウガは足を止めて、クルリと振り向いた。そしてなのはと昴を真っ直ぐ見つめる。

「お前等の事は、俺が守る。絶対にだ」

少年の眼差しには、強い意志と確固たる決意があった。

声には、力強くも優しい響きがあった。

「——うん！」

なのははリヨウガの言葉に、元気良くなずいた。

二人の様子に、昴も少し元気づけられた。

階段を上り終わると、教室の並ぶ廊下に出た。表札は文字がやはり左右反転していて読みにくい、どうやら三年生の教室のようだ。

「って事は、三階か」

「屋上はこの上だね」

「ひいっ！」

突然昴が悲鳴を上げる。

振り向いた二人は、彼女が指差す方へ視線をやった。外側に面した窓ガラスに映る三人の姿。だがその鏡像は、横を向いていた。三人とも窓ガラスと向かい合っているのに、その窓ガラスには彼等の横顔が映っているのだ。

「……手抜きにも程があるだろ」

「突っ込むとこ、そこなの!？」

リョウガのつぶやきに、なのはと昴は思わずハモる。

——不意に、窓ガラスの鏡像が一斉にこちらを向いた。

その顔は、悪意に満ちたいやらしい笑みを浮かべている。

鏡像が窓ガラスから抜け出して、廊下に躍り出た。

「プロテクション・サークル!」

リョウガが防御結界を張って、なのはと昴を守った。

彼自身は、アームデバイス『大蛇』で自分の鏡像を切り裂いていた。

二人の少女の鏡像は、腕は猿のように長く伸び、指先からは鋭い爪を生やし、口は誇張なしに耳まで裂けて、邪悪な戯画さながらの姿と化していた。その姿で、ドーム状の防御結界の表面に爪を立てるが、一見薄いガラスにも見える結界はその攻撃を完全に防いで、ものともしなかった。

リョウガが左手をかざし、射撃魔法の術式構築を始める。

しかし背後から迫る殺気に、反射的に剣を振った。

背後に振られた剣は、同じ蛇を模した剣とぶつかり合い、廊下に金属音を鳴り響かせた。

たった今斬り捨てたはずの自身の鏡像が、元通りに姿を修復させていた。

「邪魔だ!」

リョウガは鏡像の腹に蹴りを入れて突き放し、術式を起動させる。
「クロスファイア……!」

少年の周囲に、九つの光球が浮かび上がり――、

「シュート！」

三つの鏡像目掛けて、三発ずつに別れた光球が同時に発射された。なのはと昂の偽者はその光球に身体を撃ち抜かれて倒れ、そのまま泡となって溶けて消えた。

しかしリヨウガの偽者は――手にした剣が輝いたかと思うと、迫り来る三つの光球を全て打ち払い、消し去った。

「クロスファイア……」

次いで、土の中でうめく亡者のようなくもった声で、呪文を唱える。

先程のリヨウガ同様に、周囲に複数の光球が発生した。

「シュート」

十を越す数の光球が、四方八方からリヨウガ目掛けて襲い来る。

リヨウガは左手から魔法陣を発生させる。それは光の壁となつて、敵の射撃魔法を防ぎきった。

「バーストキャノン」

鏡像が右手をかざした。その前方に光が集まり、光球となり、更に光の輪がそれを囲むように発生する。

リヨウガは左手の指先で大蛇の刃をなぞった。すると刃が青白く輝き出す。

「……ファイア」

鏡像が光球を発射した。

「カウンタースラッシュ！」

その光球をリヨウガは輝く剣で真つ向から切り裂いた。二つに別れた光球は、リヨウガの背後、防御結界に包まれたなのはと昂の脇を通り過ぎ、壁にぶつかり爆発した。

「目には目を、歯には歯を……魔法剣士には魔法剣士をとてこか」
リヨウガは大蛇を両手で握り直す。

「簡単にコピー出来るほど、安くはないつもりだがな」

不敵につぶやくリヨウガの背中を見守りながら、なのはは彼の無事を祈らずにはいらなかった。

迷宮ハイスクール／銀仮面の魔導師

迫り来るもう一人の自分。

矢継ぎ早に繰り出される刃。

自身の鏡像の猛攻を剣で捌きながら、光岡リョウガは計算していた。

今なのはと昂を守っている防御結界は、解除されない限りあと十分は保つ。その十分以内に敵を排除しておきたい。

魔法術式を構築。敵をバインドで捕縛する。光輪で敵を縛り上げるシンプルな物だが、攻撃中だった鏡像はあっさりと捕らえられた。「スターダスト……」

リョウガはすかさず次の魔法術式を構築した。鏡像の周囲に、サッカーボールほどの大きさの光球が十個、発生した。

更に光の壁がリョウガの前に、廊下を遮断するように現れる。それはもう一枚、彼の鏡像の背後にも現れ、敵は周囲の光球群もろとも隔離された。

「エクスプロージョン！」

光球群が強く光ったかと思うと、十個が同時に爆発した。

光の壁に遮られて行き場をなくした熱と衝撃が、鏡像を確実に焼き尽くす。しかし敵はまだ生きていた。

「プレッシャーウォール！」

リョウガの詠唱によって、廊下を遮断していた二枚の光の壁がその幅を急速に狭めていく。野獣の上顎と下顎の牙ががちりと噛み合って獲物に食い込むように、二枚の光壁は前後から鏡像を挟み捕らえた。

光壁は更に狭まっていき、鏡像を押し潰しながら合わさると、そのまま消滅した。

あとに残ったのは、爆発によってくり抜かれたかのように消え去った廊下のみ。連続攻撃で鏡像は跡形もなく消滅していた。

「ずいぶんと乱暴だな」

背後からの声に、リヨウガは剣を構えながら振り向く。

防御結界に守られたのはと昴。

更にその向こうに、男が立っていた。

赤いローブをまとい、目を銀色の仮面で隠した痩せぎすな男だった。両手にはめた赤いグローブの手甲には、半球状の宝玉が埋め込まれている。

リヨウガとなのはは、その宝玉がデバイスの中枢メモリだと覚った。つまり赤いグローブは、この男のデバイスという事だ。

「それも若さか。だが、何でも力任せに押し切るようでは、一流の魔導師とは言えん」

男は、自宅の廊下を歩むような落ち着いた足取りで、防御結界に近付き、右手を結界表面に添えた。

「この防御結界にしてもそうだ。直接攻撃には非常に強いが、構造が単純すぎる」

男の右手に、魔法陣が浮かぶ。

——次の瞬間、防御結界は光の粒子に還元されて、消滅した。

「——！？」

声こそ上げなかったが、リヨウガは驚いた時の癖で、目をパチパチと瞬かせた。

確かに今の防御結界は、起動の早さと防御力を優先した物で、構造そのものへの干渉に対しては弱い。しかし……、

（何でもありませんって感じで消し去りやがって……）

胸の内にフツと湧き上がった感情を押し殺し、リヨウガは魔法の構築を始める。

なのはと昴の足下に魔法陣が浮かび上がり、二人はその魔法陣に吸い込まれるように消えた——と同時に、リヨウガの背後に現れた魔法陣から、再び姿を現す。

「ほう」

仮面の魔導師は、小さく感嘆の声を漏らした。

「短距離とは言え、我が結界内で転送魔法を使えるとはな……ガー
ディアン」の役目を任されるだけの事はある、か」

「この結界を作ったのは、やはりお前か」

リヨウガはアームドデバイス『大蛇』を構え直した。

「いかにも」

魔導師は時代がかった口調で答える。その態度には、こちらが苛
立ちを覚えるほどの余裕が見て取れた。

「この街で怪物を暴れさせているのも、お前か？」

「いかにも」

答えた瞬間、彼の身体は青白い光輪で拘束された。

「手が早いな」

「それがモットーだ……怪物を造り出したのも、お前か？」

「否」

「この街で何をするつもりだ？」

「さて、私は雇われの身なれば、そこまでは知らぬ」

「なら、その雇い主は誰だ？」

「まさか、その質問に答えると本気で思っではおるまいな、ガーデ
イアン」

「……………」

答える筈がない。質問してから、リヨウガもそう思った。

「それに、このような簡単な捕縛輪に捕まっていてやるほど、私は
優しくはない」

魔導師が身を揺する。

リヨウガの仕掛けた捕縛輪はそれだけで、先程の防御結界同様に
消え去った。

「俺も、この程度で捕らえられるとは思っちゃいない」

リヨウガはしかし、うるたえる事なくパチンと指を鳴らした。

魔導師の周囲を光球が囲む。

本来は術者の周囲で生成する射撃魔法弾を、標的の周囲に遠隔生
成したのだ。

「クロスファイアシュート、アラウンドシフト！」

魔導師を取り囲む光球群が、リヨウガの詠唱に従い、流星雨となつて襲いかかった。

「馬鹿めが」

仮面の魔導師がニヤリと笑い、グローブの宝玉が煌めく。

瞬間、クロスファイアシュートの光球は空中でピタリと静止した。光球群だけではなく、攻撃者であるリヨウガも、その背後のなのはや昂も、ビデオの静止画像のように動かなくなった。

「我が結界内だと言ったはずだがな」

魔導師は動きを止めた光球の隙間をくぐり抜けて、リヨウガに歩み寄る。

リヨウガのメタフィールドと同様に、彼も自身の結界内のロケーションを自在に変更出来る。

当然、自分以外の時間の流れを極限まで遅くする事も、可能だった。

「血気にはやるのは若い証拠……だが若さは、未熟さの裏返しでもある」

魔導師は懷から、ナイフを取り出した。バナナ状の緩やかなカーブを描く刃が、窓から差し込む夕陽を受けて不気味な色合いを浮かべていた。

その刃を振り上げて、魔導師は不意に動きを止めた。

仮面越しに、彼の背後にいる栗色の髪の少女に視線を向ける。

「ほおう……」

なのはから莫大な魔力量を感じ取って、彼は感嘆の声を漏らした。今までに感じた事のない量だ。管理外世界でこれほどの逸材と出会つとは……。

「あの腐れ学者への、良い手土産になるな」

「その腐れ学者が、お前の雇い主か？」

聴覚がリヨウガの声を捉えた瞬間、魔導師の背中をゾクリとした冷たい感触が走った。

意識するよりも先に身体が動き、リヨウガとの距離を広げようとして――瞬間、リヨウガの手に握られていた大蛇が跳ね上がった。廊下の天井に、ナイフを握った右腕が、血の緒を引いてポーンと舞った。

右腕を切断された魔導師の悲鳴は、時間進行の遅延が解除されてようやく炸裂したクロスファイアシュートの爆音にかき消された。

アームドデバイス『大蛇』のセンサーが、結界内の時間進行の変化を感知した。

そしてリヨウガが結界の構造プログラムに介入し、その時間操作を強制解除したのである。

「馬鹿な……」

「ガーディアンは伊達じゃないって事だ」

傷口と、そこに至る動脈を捕縛輪で縛り上げ止血する魔導師に、

リヨウガは大蛇の切っ先を突きつける。

「結界を解除して投降しろ。自首すれば手当てしてやるし、再生治療も受けさせてやる」

「若造が……！」

魔導師は歯を剥き出しにして、リヨウガを睨みつけた。

残った左腕を床につけると、魔法陣が現れる。

「良かるう、望み通り結界を解除してやる……ただし、貴様等が出られるかどうかは別だがな！」

魔導師の姿が魔法陣の中へと消えていく。

同時に、地面が揺れ始めた。学校全体が揺れている。

「何をした！？」

「この結界その物を、虚数空間に転送した……解除しろと言ったが、元の世界に戻せとは言ってなかったな、ガーディアン！ 結界

は解除してやる！　そして水も空気も光もない無の世界に消えてなくなれ！　デア・ドラ・ジャザム！」

言い捨てて魔導師は完全に姿を消した。と同時に魔法陣も消える。窓の外の景色が、徐々に消え始めていた。消えた後には、様々な色の混ざり合った混沌とした空間が広がるのみ。

あらゆる魔法が無効化され、ただ重力に従って落ち続けるだけの次元の穴。

解除してやると魔導師は言ったが、実際は虚数空間内で結界が無効化されているだけに過ぎなかった。

「リョウガくん、どうしたら良いの！？」

「さつきみたいな瞬間移動とか、出来ないんですか！？」

「徐々に削り取られてるって感じだが、結界の転送妨害の効果はまだ残ってる。結界内の見える範囲でならともかく、結界の外へは無理だ」

リョウガの言葉に、二人の少女は打ちのめされたような気持ちになった。

「だが、もう少しすれば何とかなる」

しかしリョウガの声には、諦めは一切なかった。

「さつきも言ったように、結界は徐々に削り取られてる状態だ。このまま削られて、結界の力が弱まれば元の世界への転送も可能になる……　かなりギリギリのタイミングになるがな」

大蛇を床に突き立て、転送魔法陣を張り巡らせる。

「掴まれ」

言われて、なのはと昴はリョウガのマントをギュッと握った。

校庭や他の校舎は既に消え去り、廊下の端に虚数空間が顔を覗かせている。

リョウガは焦らず、転送先の座標を設定し、術式を構築していく。なのはも昴も、急かすような事はしなかった。

「お前等の事は、俺が守る。絶対にだ」

リヨウガのあの言葉を、二人は信じていた。
虚数空間が廊下を削り取り、手を伸ばせば届く距離にまで迫った瞬間、リヨウガは転送魔法を起動させた。
魔法陣から溢れ出る光が、三人を包み込み――。

物理や家庭科などの実習を行うための、二階建ての実習棟。

その屋上に青白く光る魔法陣が現れ、そこから吐き出されるように、リヨウガたちが現れた。

何事もなく着地したリヨウガ。しかしその上になのはと昴が降ってきて、結局押し潰された。

「あう……ここは？」

なのはが辺りを見渡し、夕焼けで朱に染まる見慣れた校舎である事を確認する。

部活を終えて下校していく生徒たちの声も聞こえている。

「元の世界に戻れたんだ……！」

「私たち、帰れたんですね……！」

脱出に成功したのを知って、なのはと昴は「良かったー！」と声を揃え、安心の余りに抱き締め合った。

「中島さん、怪我はない？ 大丈夫？」

「はい！ あ、それと私の事は、昴って呼んでください！」

「じゃあ私も名前で呼んで良いよ、昴！」

「はい、なのはさん！ ありがとうございます！」

「昴！」

「なのはさん！」

「昴！」

「なのはさん！」

「昴！」

「なのはさん！」

「——いつまでやってんだ」

興奮して互いを名前で呼び合う少女たちに、リヨウガが何かをこらえるような声をかける。

「へ？」

そのリヨウガの声が何故か自分のお尻の辺りから聞こえてきて、なのはは身を捻って視線を向ける。

仰向けになったリヨウガの胸元辺りに、自分は座り込んでいた。リヨウガの顔の下半分が、スカートに隠れている。ほんの少し注意を払えば、彼の顎のラインをヒップの感触で確かめられる……そんなボジションだった。

そして昴は、リヨウガの腰の辺りをまたぐ形になっている。

今の自分たちの位置関係は、見ようによつては……。

「キヤアアアッ！ ごめんなさああああいつ！」

今時の高校生にしては性知識が乏しい方だが、それでも自分たちが物凄い格好でいる事がわかって、なのはは悲鳴を上げた。昴も数秒遅れて、状況を理解して悲鳴を上げる。

「誰だあーっ！ 屋上で騒いどるのはあーっ！」

そこへ階下から、生活指導の北村魁きたむら・かいの怒鳴り声が響く。

（もう一つか二つ、仕事しなきゃな……）

これから昴や、こちらに向かつて来ているであろう北村の記憶を操作して、『なかった事』にしなければならぬ。

自分の上から下りて、どうしようどうしようと慌てふためく少女たちを横目で見ながら、リヨウガはため息をついたのだった。

魔法事典（前書き）

これまでに登場した魔法を簡単に紹介します。

魔法事典

クレツセントカッター

三日月状の魔力刃を飛ばして標的を切断する。

リョウガは攻撃終了後に、これをバインドに変えてなのはたちを空中で捕らえた。

クロスファイアシュート

複数の魔力弾を生成して発射する射撃魔法。複数の敵を攻撃したり、単一の標的に四方八方から攻撃したりなど、幅広い使い方が出来る。

本来術者の周囲で生成する魔力弾を、標的の周囲に取り囲むように生成して撃ち込むアラウンドシフトという応用技もある。

バーストキャノン。

魔力を圧縮して作り上げた光球を撃ち出す砲撃魔法。加速や属性付与の魔法を加える事も出来る。

グレネードショット

バーストキャノンの廉価版とでもいうべき魔法。

スターダストエクスプロージョン

範囲攻撃魔法。魔力球を標的の周囲に複数生成。その魔力球ごと標的をバリアで隔離したあと魔力球を爆発させて、バリア内の標的を吹き飛ばす。

クリスタルコフィン

範囲攻撃魔法。自分たちを防御結界で保護したまま、周囲に冷凍効果を持つ魔力光を放射して、あらゆる物を無差別に凍結させる。

プレッシャーウォール

二枚の光の壁で標的を挟み込み、押し潰す。敵の反撃を遮断しつつ攻撃を行える利点はあるが、建物の廊下などの狭い所でなければ、敵に逃げられる可能性がある。

デバインスラッシュ

魔力を付与した刃で斬りつける斬撃魔法。光刃が伸びる事で、刃の長さ以上の巨大な標的も切断出来る。

カウンタースラッシュ

魔力で強化した剣で魔力弾を切り裂く、文字通りの迎撃魔法。

プロテクションサークル

展開した魔法陣から、ドーム状の光の壁を生成して、魔法陣の中の対象を守る防御魔法。

治癒結界

結界内の対象の怪我や麻痺、毒などの状態異常を治す。

フレイムバースト

展開した魔法陣から、魔力変換で生成した火炎を放射する魔法。

デイメンションブレイク

空間を切り裂き、別の空間へ通じる出入口を開く。結界への侵入や脱出などに主に使用されるが、結界自体にこういった魔法への対策が施されている事もある。

メタフィールド

結界内のロケーションを術者が任意に設定して、戦いに有利なフ

イールドを形成する。広さ、地形、気温や湿度、時間進行速度まで自在に変えられる。

リヨウガは相手の不利なロケーションを設定する事が多い。

ミラージユガーデン

メタフィールド同様、内部ロケーションを任意に設定した結界。術者の銀仮面は私立聖祥大附属高校の校舎を、鏡写しにしたかのように左右反転させた状態で結界内に構築。あらゆる物に怪物を擬態させて解き放っていた。

デイスペル

魔法解除。対象となる魔法のプログラム構造を解析して書き換え、魔法効果そのものをキャンセルさせる。

構造を弱体化させてから強引に破壊するバリアブレイクやバインドブレイクにくらべて、発動までに時間がかかるのが難点。

だがそれ故に、このデイスペルをどれだけ手際良く行えるかで、その魔導師の力量を測る事も出来る。

属性変換

魔法に使用される魔力というエネルギーは、空気中の魔力素を魔導師が体内のリンカーコアに取り込み、圧縮して生成される。

この生成過程にアレンジを加える事で、魔力を炎や電気、冷気に変える事を属性変換と呼ぶ。

リヨウガはこの技術を使って、射撃弾や砲撃弾に炎熱属性を付与して爆発力を高めるなどの応用を行っている。

高町なのはの憂鬱／念話と鳥とお誘い

その時、二年一組は国語の授業中であつた。

田代まさしにそっくりな事で定評のある男、国語担当の瀬戸始が教科書の内容を説明している。

光岡リヨウガは黒板に記された内容をノートにまとめていた。その最中――、

『リヨウガくん、リヨウガくん』

なのはの声がした。

しかし彼女の席から呼びかけられたのではない。ましてや、耳元でささやかれた訳でもない。

頭の中に直接響くようなこの感覚は、魔導師が使う念話であつた。

『何やってんだ』

リヨウガも念話で応対した。

『えへへ……思い切つてやってみたら、結構覚えてたみたいなの』
なのはの念は、やははにかんだような感触があつた。

『で、授業中に何の用だ？』

『今度の日曜日、またリヨウガくんのお家に行つても良いかな？』

この前のお礼がしたいの』

(……そういう事は最初の一発目に聞けよ)

以前の不意の来訪を思い出して、リヨウガは心中でぼやいた。今日聞くくらいなら、何故あの時はアポを取らなかつたのか。

(何かズレてるな、こいつ)

それがリヨウガの、なのはに対する評価だつた。

『ダメ、かな？』

『勝手にしろ。ただし俺は忙しいから、行つても居ないかも知れないぞ。それでも文句言つなよ？』

『うん、ありがとう』

『まったく……だいたいお前は……んな……か……う……』

『リヨウガくん?』

どうした事だろうか。リヨウガの念話が途切れ途切れになり、何と言ってるのかわからない。

なのはは念話の受信感度をめいっばい上げて、しっかり聞き取るうとしたが、そこへ――、

わっ っ ！！

言葉にすると、まさにそうやって大声を出されたような感じで、強烈な念が届いた。その念に脳を思いつきり叩かれたような錯覚すら覚えて、なのははビクンッ！と身をすくませる。その弾みでバランスが崩れて、体の重心が後ろに偏る。

「わっ、たっ、とっ……！」

椅子が傾き、なのはは体勢を直そうともがくが、

「わひゃっ！」

それもむなしく、奇声を上げてド派手に倒れてしまった。幸い一番後ろの席だったので彼女以外に被害が出なかった。彼女もスカートの下にスパッツを穿いていたために必要以上に恥を晒さずに済んだのは幸運と言えるだろう。

「何してるんだ、高町」

突然の出来事に対して、瀬戸はやけにノンビリした声で尋ねる。

「ふええ……何でもないです」

「何でもないのにこけるのか、お前は」

「あう……」

しょぼんとうなだれながら、なのはは椅子を立てて席に座り直した。

瀬戸は黒板の横の掲示板に貼ってある時間割表に目をやる。

「今日は体育はないみたいだが、何でスパッツを穿いてるんだ？」

「先生、生パンで外を出歩く人なんていないよ」

廊下側の席から、初丘理紗が笑いをこらえた声を出した。

ただし、その笑いはなのはのズッコケに対してなのか、瀬戸の間の抜けた疑問に対してなのかはわからない。おそらくは両方に対してだろうが。

「そうか……」

瀬戸はただそれだけつぶやいて、授業を再開した。

しかしその背中には、奇妙な哀愁が漂っている。

「なのはの生パン見れなくて残念だったね、先生」

理紗の言葉に、今度は瀬戸がビクツと身をすくませたのだった。

昼休み。

天気が良いので、なのはは屋上で昼食を取っていた。理紗や鞘香に加えて、今日は三組の中島銀河とその妹の昴も一緒だ。

その昴は、なのはが作ってきたショートケーキを幸せそうに食べている。目も鼻も口もそのまま溶けて顔からこぼれ落ちてしまうのではないかと思うほど、とろけきった表情だった。

「ん、おいひゅっ！」

「口に物を入れたまま喋らない」

同じくショートケーキを食べながら、銀河は姉らしく妹をたしなめた。

「でも本当に美味しい……これなら、もうお店に出しても良いんじゃない？」

「私もそう思います！」

姉の言葉に、昴が続く。

「それはだめ」

なのはは姉妹の言葉に、キツパリとそう言い切った。

「それは最低でも、お母さんから七十点以上を貰えてからって決めているの」

「ちなみにこのケーキで何点くらい？」

「二十八点」

なのはの回答に、質問した銀河は食べる手が止まった。

（これでもまだ、目標値の半分にも達してないって……）

ケーキ作りの奥深さを思い知らされると同時に、喫茶翠屋の人気の秘密を垣間見たような気がした。

「大丈夫ですよ、なのはさんならきつとすぐに貰えます！」

「うん、すぐには無理だけど、私頑張るよ。昴」

根拠もなしに励ます昴と、朗らかに応対するなのはを、銀河は交互に見やる。

昴の話では、柄の悪い連中に絡まれてたところを、なのはが機転を利かせて助けてくれたらしい。それをきっかけに名前呼び合うようになったそうだ。

いつも自分にベツタリとくつついていた妹が、このまま姉離れしてくれば、銀河としては一安心だが……、

（そのきっかけが彼氏が出来たからじゃないっていうのも何か、ね……）

どうしても別の不安を抱いてしまうのだ。

「ところでさ、あんた光岡とはどうなったの？」

理紗が横から、話題を変えてきた。

「リョウガくん？」

「ずっと前と一緒に弁当食べたし、最近アイツの方をチラチラ見てるし」

「ふえっ!？」

なのはの頬にサツと赤みが差した。

「なに？ ただの気紛れとかじゃなくて、本当に気があるの？」

鞘香も面白そうに話に加わる。

「ふっふっふ、そういう事ならもっと早く言いなさいよね。この鞘香ちゃんがバッチリ相談に乗ってあげるのに」

「ダメージの少ない振られ方とかね」

「うっさい黙れ」

茶々を入れる理紗を、鞘香はジロリと睨む。

「だって本当の事じゃん」

「え、鞘香って誰かに振られた事あるの？」

銀河が尋ねる。

「そうそう。一年の時に同じクラスの」

「だあああーっ！ それ以上言うなあーっ！」

鞘香が理紗の口を押さえつけ、無理矢理口を封じる。

「ところであの人、その光岡さんじゃないですか？」

昂が指差した方を全員が見やる。

フェンス越しに屋上から見下ろせる、二階建ての別棟の屋上。そこにいるのは、髪を後ろで結んだ一人の男子生徒。

確かに、光岡リョウガである。

「あ、本当だ」

鞘香が確認する。

「あんたよくわかったわね。知り合い？」

理紗の質問に、昂の代わりに銀河が答えた。

「この子、私と一緒に見てたからね。あんたに頼まれて」

「そうだった？」

理紗は小さく首を傾げる。どうやら忘れてるらしい。

彼女たちの視線に気付かぬまま、リョウガは何かを探すように、キョロキョロしている。

やがて彼の足下に、一羽の鳥が舞い降りてきた。遠くからでは種類はわからないが、赤・緑・黄の三色が鮮やかに羽を彩っていた。

「オウムかな？」

「オウムにしては大きすぎるような……」

昂の言葉に、なのはがそう返した。

リョウガはポケットから出した小さな包みを地面に広げた。鳥はその包みの中の物をついばみ始め、リョウガはその様子をじっと眺めている。

「ペット？」

「だとしても、わざわざ餌を貰いに学校まで来ないでしょ」

理紗の疑問に銀河が答えた。

なのははふと思いついて、念話でリヨウガに語りかけてみた。

『リヨウガくん、聞こえる？』

『何だ』

『今屋上に居るんだけど、その鳥は？』

『使い魔』

リヨウガは振り向かずに、それだけ答える。

使い魔とは、生物の死体に魔法で造り上げた人工の魂を宿らせたものである。

大抵の使い魔は、特定の目的の為に造られ、その目的を果たすと消滅する。これは使い魔の存在維持にも創作者の魔力が使われるからだが、莫大な魔力量を保有する魔導師の場合、自身のボディガードやサポート役として、長期間養っている事もある。

なのはの友人とその使い魔が、ちょうどそんなケースに当てはまる。

『その使い魔と何してるの？』

『仕事だ。お前には関係ない』

『人の会話に割り込むなんて、無礼な女だね』

不意に女の念が割り込んできた。

『ええっと、使い魔さんですか？』

『他に誰がいるってのさ』

使い魔は呆れたように答えながら、嘴で羽繕いをする。

『素人のくせに、プロの仕事に気軽に嘴突っ込むんじゃないよ』

そう言っただけで使い魔は念話の回線を切断し、リヨウガの足に頭を擦り付けてから、翼を広げて飛び去った。

『ご、ごめんリヨウガくん。邪魔しちゃったかな？』

『いや、用事はもう済んだ』

しかしリヨウガの念には、苛立ちのような感触がある。

『それと、考えなしにホイホイ魔法を使うな』

『あつ……ごめんなさい……』

『しかも、相手以外にも聞かれるへばい念話なんざ尚更だ』

『あつ……』

なのはは、返す言葉を失った。

念話はいわゆるテレパシーだ。

距離に関係なく相手と確実に連絡が取れる上に、複数相手にして
るでもない限りは、相手以外に聞かれる事はない。

確実性と秘匿性に優れている筈の念話が相手以外にも伝わるのは、
本来なら有り得ない事なのだ。

『……お前とは一辺、しっかり話をしておく必要があるみたいだな』
『へ？』

『今度の日曜と言わず今日の放課後、俺の家に来い』

『ふえっ！？』

『わかったな』

『は、はいっ！』

突然と言えば突然の呼び出しに、なのはは緊張した返事をした。

リヨウガは最後まで彼女たちの方を向く事なく、立ち去る。

理紗たちがリヨウガと鳥の事で、ある事ない事喋っている。

しかしなのはは、それどころではなかった。

（私、何かまずい事しちゃったかな……）

リヨウガからの念話には、怒りに近いざわめきが感じられた。

本来なら胸をときめかせる事すらある“ボーイフレンドからのお
誘い”に、不安すら覚えるのはだった。

高町なのはの憂鬱／疾風迅雷のごとく

放課後。

なのはは緊張した面持ちでソファに座り、出されたコーヒーを飲んでいた。

リョウガの家に訪れるのはこれで二度目だが、今日はリョウガが何やら不機嫌なせいで、妙にプレッシャーを感じる。

背の低いテーブルを挟んで向かい合うリョウガは、自分で入れたコーヒーを一口すると、カップを置いてなのはを見据えた。

「単刀直入に言うぞ」

「はい」

何の前振りもなしに本題に入られて、なのはは思わず背筋をピンと伸ばす。

「俺の仕事にゴチャゴチャと口を挟むな」

用件はやはりその事だった。

「昔はどうあれ、今のお前は管理外世界の民間人なんだからな」

「でも……」

「お前の記憶を操作しなかったのも、ある程度情報を与えたのも、そうする事で少しでも事件発生を未然に防ぎたかったからだ。俺の助手をやってもらいたい訳じゃない」

「あう」

言わんとした事を先に言われて、なのははうなだれた。

「だいたい、昼間みたいなお粗末な会話しか出来ないお前に何が出る？ 魔力保有量は確かに高い。ム力つく話だが、ほんのちよつとだけ俺より上だ……ほんのちよつとだけだがな」

わざわざ二回言ってまで強調するリョウガ。その様が、悔しさをやせ我慢してる小さな子供のように見えて、なのはの口元に笑みが浮かんだ。

同時に、何だかんだ言っても自分の事を認めてくれている部分も

あるのだと知って、嬉しくなる。

「だがな、魔力保有量だけで務まるほど魔導師は簡単じゃない」

「それはわかってるけど……でも、やっぱり見て見ぬ振りなんて、私には出来ないよ」

なのはリヨウガの目を真っ直ぐに見据えて言った。

「リヨウガくんが守っているこの街は私の街で、そのリヨウガくんは私のクラスメートなんだよ？ クラスメートが街を守って戦ってるのに、それを黙って見ているだけなんて嫌だよ……！」

誰かの役に立ちたい。誰かの為に何かをしたい。

それは幼い頃からなのはの胸にある思いだった。父の士郎が事故で重傷を負って入院していた頃、その父にも、他の家族にも何もしてやれなかった幼少時の記憶が、尚更『誰かの為に』という気持ちを強くさせていた。

「じゃあどうする？」

リヨウガは冷淡にも近い落ち着きで問いかける。

「また囑託魔導師にでもなるか？」

その言葉に、なのはは道が拓けたような気持ちにすらなった。

正規の管理局員になるには時間がかかるが囑託魔導師ならば試験を受けるだけでいい。晴れて合格すれば、何の気兼ねもなくリヨウガの手伝いができる。

「で、俺の仕事が終わった後、お前は どうする？」

「えっ？」

「もう手伝う必要はないから、また囑託魔導師をやめるのか？ その後何か別に事件が起きたら、また囑託魔導師になるのか？ コンビニとかの短期のアルバイトじゃないんだぞ？」

リヨウガの問いに、なのはは答えられない。リヨウガは更に続ける。

「それとも、ずっと囑託魔導師でいるなり、正規局員になるなりするのか？ でもお前にだって、将来の夢って程じゃなくても、何かしら目標はあるだろう」

夢。

目標。

なのはが思い浮かべたのは、喫茶翠屋のパティシエ。

「管理局入りするって事は、そういうのよりも管理局の都合を優先しなきゃならないって事だぞ？」

「……………」

なのはは言葉に詰まって、うつむいた。

母の桃子は、声を荒げたり罵ったりこそしないものの、その指導は厳しい。それは娘の決意が嬉しいからだ。なのはの気持ちを真摯に受け取っているからこそだ。

それがわかるから、なのはは母の厳しい指導に付いて行ってるのだ。母を喜ばせたい。母の期待に応えたい。何より、母のようになりたい。

だが管理局入りすれば、その夢を諦めなくてはならない。

しかしリヨウガの力になるには、囑託という形でも管理局入りしなくてはならない。

答えの出せないジレンマに、なのはは拳を握る。

「……………気にするな。お前は悪くない」

リヨウガの声色が不意に優しくなり、なのはは思わず顔を上げた。リヨウガはソファから立ち上がり、すぐそばに立っている。

「俺の判断ミスだ。最初からこうしてれば良かった」

かざした右手に、魔法陣が浮かんだ。

「何を、するの……………」

「お前の記憶を修正する」

「そんな……………」

「心配するな。元に戻るだけ……………ただの一同級生に戻るだけだ」

「そんなの嫌っ！ せつかく仲良くなれるって思ってたのに！」

「……………そういうのは、別の誰かとやれ」

リヨウガは右手をなのはの額にかざす。とっさに逃げようとするなのはだったが、その体を光輪が捕らえた。

「大丈夫だ、すぐに終わる」

「嫌！ 嫌ったら嫌！ 絶対に嫌あ！」

なのは小さな子供のようにわめく。

光岡リヨウガ。

教室の片隅で、いつも一人静かに本を読む少年。ぶっきらぼうな態度で、他者との関わりを拒む少年。

しかし彼は、自分と同じ魔導師だった。この街を、海鳴市を守り孤軍奮闘していたのだ。

新しく友達になれる。そう思っていた。そう思える程度には親しくなれたと思っていた。なのに、それがリセットされてしまうのか？

「そんな……そんなのってないよ！」

怒りにも似た感情で、なのはは思わず叫んだ。

瞬間、彼女の体から薄桃色の光がほとばしり、リヨウガの右手の魔法陣を、なのはを縛る捕縛輪も消し飛ばす。

「くっ！？」

部屋着の右袖も肘までズタズタに破れ、熱を帯びた衝撃がリヨウガの右腕を稲妻のごとく駆け抜けた。リヨウガはたたらを踏んで後ずさり、そのまま尻餅をついた。

（こいつ……！）

感情の爆発に伴って無意識に行った魔力放出が、リヨウガの魔法をそのプログラム構造から根こそぎ吹き飛ばしたのだ。

（ただ魔力を放出しただけで……！）

何の術式構築も行わずに相手の魔法をかき消す。極端な話、それはリヨウガがなのはに力負けしたも同然だった。

「ご、ごめんなさい！」

なのはは何が起きたかを理解すると、リヨウガに駆け寄った。

「リヨウガくん、大丈夫！？」

「……ああ。ちょっと痺れたただけだ」

「手当てしないと……」

「大丈夫だ」

痺れてはいるが、外傷はない。

「本当に、ごめんなさい」

しかしなのはは、暗い顔になっていた。

「リヨウガくんの言う通りだね……自分の力もコントロール出来なくて、暴発させて……こんなんじゃ、リヨウガくんのお手伝いなんて、無理だよ……でも」

なのははリヨウガの右手を、両手で優しく包んだ。

「それでも、リヨウガくんと仲良くしたい。友達に、なりたいの」
リヨウガは、その言葉には答えなかった。

何故かとも聞かなかった。

聞かなくともわかる。 magari なりにも同じ教室で過ごしているのだ。

彼女は、寂しそうにしてる相手を放つてはおけない。悲しそうな相手、困っていきそうな相手を見過ごす事が出来ない。道端でうずくまってる人がいたら、ただ靴紐を結び直しているだけであつたとしても、彼女はまず声をかけるだろう。

高町なのはとは、そういう少女なのだ。

「今日はもう帰れ」

「でも……」

「俺は大丈夫だ。お前の記憶をいじったりもしない。だから帰れ」

「う、うん……」

「それと」

「……………?」

「日曜日は、来るなら昼前にしろ。午前中なら家にいる」

「……うん!」

なのはは大袈裟にうなずいた。

リヨウガが自分のために時間を空けてくれた。それが嬉しかった。

黄昏時の家路を、なのはは軽い足取りで歩く。頭の中では、日曜日にリヨウガに食べさせるケーキのレシピをあれこれ考えていた。「楽しそうだな」

背後から男の声がした。

振り向くと、目元を銀仮面で隠したあの結界魔導師が立っていた。リヨウガに切り落とされた筈の右腕も付いていた――いや、それは仮面と同じ光沢を放つ、銀色の義手だった。その手の甲に、左手のグローブ型デバイスと同じ宝玉が埋め込まれてあった。

「な、何か用ですか？」

「“これ”の代金を、腐れ科学者に請求されてしまったな」

魔導師が答え、その銀色の義手を示すようにかざすと、捕縛輪が発生してなのはの体を捕らえた。

「しかし私は昔から金銭に縁がないのでな。貴様の体で清算する事にしたのだ」

「私の体でって……」

なのはの背中を、ぞくりとしたものが走る。

「なに、操の心配はいらぬ。あやつにとって女とは、解剖するか改造するだけの物でしかないからな」

「どっちもお断りだよ！」

不意に頭上から割って入る声。

二人が思わず見上げたオレンジ色の空に、人影が舞っていた。

両の手足を装甲で守り、チャイナドレスに似た胴衣を纏う髪の長い女。見た感じ二十代のようなうだ。激しい気性が、美しい顔に色濃く現れている。

燃えるような真紅の長髪をなびかせ、肉感的な脚が鞭のようにしなり、魔導師の顔面に鋭い回し蹴りを打ち込んだ。

女はクルリと宙返りしてなのはのそばに着地した。

「リヨウガに言われてこっちに羽を伸ばしてみたら、大当たりだったね」

言いながら、なのはを縛る捕縛輪を掴み、力任せに引きちぎった。

「何者だ……ガーディアン仲間か!？」

「わかつてるなら聞くんじゃないよ!」

女は怒鳴りつけながら魔導師の方を振り向いた。その弾みで、服の下の豊かな膨らみが揺れる。

体にピッタリとくつつくチャイナドレス風の胴衣が描くボディラインは、非常時にも関わらずなのはが見とれてしまう程大胆な曲線美だった。

「疾風迅雷のごとく無限の空を駆け抜ける、無敵の翼! 雷ライク駆様とは、あたしの事さね!」

名乗りを上げながら、赤毛の女は地面を蹴って魔導師に躍り掛かった。

高町なのはの憂鬱／断たれた糸

「はぁぁぁあつ！」

雷駆と名乗った女は猛烈な蹴りの連打を放つ。

銀仮面の魔導師は防御障壁を張って受け止めるが、その度に轟音が響き、蹴りの威力が尋常でない事を示していた。

「貴様の相手は、こやつだ」

銀仮面の左手のグローブから魔法陣が発生した。それが地面に投射されて大きく広がると、その魔法陣の中から全身を岩のような装甲で覆った犀に似た怪物が、ダンプカーほどもある巨体を現した。

雷駆がそちらに意識を向けた一瞬の隙を突いて、銀仮面は転送魔法でなのはの背後に移動し、捕縛魔法で彼女を捕らえた。

「この雷駆様より、そんな嘴の小さいひよっ子が良いってのかい！？」

振り返り戯れ言を口にする雷駆の背後から、怪物が鼻先の角を突き出して突進する。

雷駆の肉体があゝの角で串刺しにされる様が想像出来て、なのはは思わず目を閉じた。

「馬鹿な……！」

銀仮面の呻くような声が聞こえた。

なのはが恐る恐る目を開けると、雷駆は何事もなく立っている。

「うそ……」

なのはも思わず声を漏らした。

雷駆は背後からの巨獣の突撃を、片手で角を掴んで止めていたのだ。

「それもムカつくけどね、あたしの接待役をこんな雑魚に任せるのもムカつくんだよ」

怪物は四本の足で何度も地面をひっかき、前に進もうとするが、雷駆のパワーの前に一步も進めない。ガツシリと角を掴まれ、後退

もままならないようだった。

「羽無し風情が、この雷駆様をどれだけ甘く見てんだい！」

雷駆は声を荒げながら、角を掴んだ片手だけで巨獣をゴミか何かのように放り投げた。

宙に投げ上げられた巨体が、銀仮面となのはの頭上に降ってくる。銀仮面はとつさによけて事なきを得たが、傍らに捕らえていたなのはには、よけられなかった筈だ。

「せっかくの獲物が……！」

眼前でみすみす失われてしまった銀仮面は、予想外といえば余りにも予想外の事態に、呆然と立ち尽くす。

不意に頭上から熱気が漂ってきた。

銀仮面が見上げた先には、両の足先に炎を纏う雷駆の姿。両腕を広げて夕暮れの空に躍るその様は、巨大な猛禽を思わせた。

「くらいな！ 破邪天鳳脚っ！」

両足の炎を激しく燃え上がらせ、雷駆は火の玉のごとく巨獣目掛けて急降下。炎は巨大な鉤爪となって巨獣を八つ裂きにした。

地面のアスファルトを削りながら、雷駆は着地した。

「貴様、民間人を巻き添えにするとは……」

「その民間人に手え出したあんたに言われたかないね」

銀仮面に涼しい顔で言い返し、真紅の長髪をかきあげる。罪悪感など欠片もない顔だった。

「だいたい、誰が巻き添えになったってんだい？ あの子なら……」

余裕の笑みを浮かべ、親指で背後を――さっきまで自分が立っていた場所を指し示した。

そこには、白いマントを羽織る黒衣の剣士が立っていた。アームドデバイス『大蛇』を、今は鞘におさめて腰に吊し、両腕でなのはの体を抱きかかえていた。

「リョウガがとくに確保済みだよ」

巨獣が落ちてくる寸前に、駆けつけたリョウガが転送魔法でなの

はを救出したのである。

「それでも、もうちょっと気を付ける」

「つれないねえ……そこが可愛いんだけど」

雷駆はたしなめられてもどこ吹く風、現れるなり叱咤するリヨウガにウインクと投げキッスを送った。

それを鮮やかに無視して、リヨウガはなのはの体に食い込む捕縛輪に手をかざす。光輪は粒子状に分解されて、消滅した。

「いつぞやの意趣返しといったところか……」

銀仮面がフンと鼻で笑う。以前、リヨウガの防御結界を自分がデイスペルで消し去った、そのささやかな仕返しだと思ったのだ。

「だがこれは、デイスペル出来るか!？」

《シュートバレット》

銀仮面がかざした左手のグローブ型デバイスのコアから電子音声の詠唱が響く。手の平に展開された魔法陣から、魔力光の弾丸が三つ放たれた――が、それは両者の距離を半分も進まないうちに、粒子状に雲散霧消した。

「何っ!？」

銀仮面の背中を、ぞくりとしたものが走る。

デイスペルは魔法のプログラム構造を書き換えて、効果そのものをキャンセルする。捕縛や結界などの長時間効果を持続させる魔法ならともかく、攻撃魔法に対するデイスペルなど出来る筈がない。少なくとも、自分には不可能だ。

（この若造が、私よりも上だとも言うのか……!）

銀仮面の胸中に、ドロドロしたものがこみ上げてきた。

「そんな事は認めん!」

再び魔法陣を展開させる。今度は射撃魔法ではない。より大量の魔力を圧縮して放つ砲撃魔法だ。

「リヨウガくん!」

「心配するな。あいつの魔法は、届かない」

両腕に抱きかかえたままのなのはに、リヨウガはそう答えた。

「――！」

銀仮面がすぐに異変に気付いた。魔力が充填するそばから消えていく。（そういう事か！）

事の真相を知った銀仮面は、術式構築を中断した。

「さっきの射撃魔法も、その前の捕縛輪も、ディスプレイした訳ではないな！？」

「気付いたようだねえ」

事態を傍観していた雷駆が感心したようにつぶやく。

なのはは何が何だかわからずに、リヨウガの顔を見た。

「手をかざして捕縛輪をディスプレイしたように見せかけたが、実際はこの結界の効果という訳か！」

結界という言葉に、なのはは周囲を見渡す。特に風景が変わっているようには見えなかった。

リヨウガはなのはを優しく地面に下ろして、銀仮面に向き直った。

「アンチ・マギリンク・フィールド。魔力結合を阻害する特殊なエネルギーを効果範囲内に充填させてある……最近完成した、最新の結界魔法だ」

「聞いた事はあったが、貴様のような若造が使ってくるとはな……」

私に気取られずに張り巡らせるとは、大した若造だ」

「高くついたぜ……」

リヨウガはヒョイツと肩をすくませる。

「わかったなら降参しろ。自首して今後の捜査に協力すれば、罪も軽くなるぞ――アルヴェ・ヴィツィーノ」

「――！」

銀仮面は心臓を鷲掴みにされたような気分だった。

「何故、私の名前を……」

「今時ディスプレイを使うのは古い世代の魔導師だけだ。加えて結界魔法が得意という特徴があれば、簡単に調べられる……あの迷宮みたいな結界で、お前は自分の出身地も教えてくれただろ」

「デア・ドラ・ジャザムだっけねえ」

雷駆が言ったのは、銀仮面がリョウガの前から逃走する際に言い残した捨て台詞だった。

「呪いの稲妻くだるべし。そんな意味の、第十七管理世界の魔導師たちの間で使われてる呪いの言葉だ。おかげで、管理局の違法魔導師ファイルで検索したら一発でわかったぞ」

「言っとくけど、この結界内でもあたしの炎は使えるよ。魔力変換で生み出した炎はね」

雷駆が足先に炎を纏いながら、銀仮面の背後を取る。

「つまり、逃げ場はないって事さ……火傷したくなかったら、神妙にお縄に」

不意に言葉が途切れた。

雷駆の足下のアスファルトに、一本の投擲用ナイフが突き刺さっていた。

ナイフの飛んできたと思しき方向を見やると、いつの間にか一人の少女が立っていた。

長く伸ばした銀髪。小学生くらいの小柄な体格を青とグレーのボディースーツに包み、更にその上からコートを身に付けていた。

少女のナイフはもう一本、リョウガとアルヴェの間にも打ち込まれている。

少女の瞳が金色に輝き出し、同時にアスファルトに突き立つナイフにも、光の輪が発生した。

「IS発動——ランブルデトネイター」

少女がパチンと指を鳴らした瞬間、ナイフが爆発し、強烈な閃光でリョウガたちの視界を奪う。

リョウガの聴覚が、何かが接近してくる風切り音を捉えた。

雷駆ではない。こういう時はまず敵を押さえるようにと教えてあ
るのだ。

リョウガは腰の大蛇を鞘走らせた。

抜き打ちの一刀に、刃物とぶつかり合う衝撃が響く。

「やるな」

次に聞こえたのは、女の声だった。

まだリヨウガの視覚ではおぼろげにしか見る事は出来ないが、その襲撃者はナイフの少女と同じボディスーツを着ていた。しかし背丈は高く、スーツの上からでもはつきりと女らしい体つきである事がわかる。

大蛇の刃とぶつかり合っているのは、その短髪の女が繰り出した拳の手首から伸びる、短い光刃だった。

リヨウガは左手に魔力を集める。アンチ・マギリンク・フィールド下でも、体内でなら魔力結合は阻害されない。そうやって練り上げた魔力を拳に集中、属性変換を加えて一気に開放した。

変換した属性は『炎熱』。強烈な火炎が拳から放出された。

同時に、大蛇から罅迫り合いの感触が消えた。

女はリヨウガの火炎放射をかわしていた。

リヨウガの頭上にジャンプしていた女は、右足の踵で後頭部の付け根を、左足の爪先で鼻と上唇の間を、正確に蹴り挟んだ。どちらも急所である。それを、ブーツの堅く補強された部分で強く蹴られて、リヨウガは膝をついた。

その頭上で女は体の上下を入れ替えて、リヨウガに向けて拳を引き絞る。

「IS発動」

その瞳が、金色に光り――、

「ライド・インパルス！」

繰り出された超高速の拳打が、リヨウガの脳天を稲妻のごとく打ち抜いた。

リヨウガが地に倒れ伏すのと、攻撃を終えた女が軽やかに着地したのは、ほぼ同時だった。

次にリヨウガが目覚めると、そこは自宅のベッドの上だった。

既に夜らしく、窓の外は暗くなっている。

「気が付いたかい、リヨウガ」

傍らにいた雷駆が、顔を覗き込む。

「治癒魔法をかけといたけど、頭痛んだりしないかい？」

「大丈夫だ。高町は？」

身を起しながら、リヨウガはまずなのはの安否を問う。

「今、晩御飯作らせてるよ。よっぽどあんたが心配みたいで、泊ま
っていくって言って聞かないんだ」

やれやれと言わんばかりに、雷駆は肩をすくませた。

「あいつ等は？」

「逃げられたよ。アルヴェ・ヴィツィーノだけじゃない。リヨウガ
を襲った奴も、爆発するナイフを投げた変なチビも……そいつ等以
外にもう一人女の声がしたから、たぶんそいつが逃がしたんだと思
う。みんな幻みたいに消えちまったよ」

「……そうか」

「ごめんよ、リヨウガ。あたしが付いていながら……」

雷駆はリヨウガの頭を抱き寄せた。服の下のふくよかな膨らみに
顔をうずめられたリヨウガだったが、

「気にするな。お前のせいじゃない」

ねぎらうように彼女の背をポンポンと叩いただけで、すぐに自分
から離れた。

「俺が甘かった。アンチ・マギリンク・フィールドの効能に浮かれ
て、警戒を怠った。その隙を突かれたんだ」

「リヨウガ……」

失態を他人のせいにならず、あくまでも自分の責任とする少年の姿
勢に、雷駆は言葉を返す事が出来なかった。

「次に現れたら、その時こそ捕まえてやるさ」

リヨウガの声には、前向きな強さがこもっていた。

「本当に役に立ちませんわねえ」

白いケープを羽織った眼鏡の女が、甘ったるい喋り方でアルヴェを責めていた。

「私達の十倍近く生きてらっしゃるくせに、だらしないっただらありませんわあ」

「……あの赤毛の女然り、アンチ・マギリンク・フィールド然り、予想外の事態が多かった」

「それを切り抜けてこそその魔導師ではありませんのお」

ギリツ……とアルヴェは齒軋りをした。

薄暗い室内で、そんな二人のやり取りを、リヨウガを打ち据えた短髪の女が眺めている。

「しかも捨て台詞のせいで身元を特定されるなんてお馬鹿丸出しですわね」

「黙れ、人形風情が！」 アルヴェの怒声も、女たちには何の効果もない。短髪の女の傍らにいたコートの少女も、何も聞こえなかったかのように黙々とウェハースを食べていた。

眼鏡の女がクスクスと笑う。

「その人形風情に助けられたあなたはさしずめ、人形未満ですわね」
「貴様っ！」

激昂したアルヴェが、腰の短剣を抜いて襲いかかる。

その短剣を握る義手に、少女のナイフが突き刺さった。

更に二本が左足の太ももに深々と打ち込まれ、アルヴェは床に倒れた。

「本当にお馬鹿さんです事……」

眼鏡の女は、アルヴェからグローブ型デバイスを剥ぎ取り、義手の甲にはめ込まれていたデバイスコアも抜き取る。

「あなたの魔法プログラムは有効活用させていただきますわ。ゆっくり休んでくださいな……永遠に」

「ま、待てっ！」

アルヴェの制止に耳を貸さず、女たちは部屋を出る。

廊下に出て、眼鏡の女が壁のコントロールパネルを操作して、ドアをロックした。

「良いわよ、チンクちゃん」

呼ばれたコートの少女が指を鳴らす。

直後、室内で爆発が起きた。

「処分完了」

眼鏡の女は楽しそうにコロコロと笑う。

彼女たちがいた部屋、今はもう誰もいない部屋の入り口の表札には、

『爆発物処理室』

と、書かれてあった。

高町なのはの憂鬱／ハプニング・ナイト

食事の用意を終えたなのはは、リヨウガの部屋へ向かう。

「リヨウガくん、起きてる……？」

襖越しに呼びかけると、「ああ」と素っ気ない返事。

襖を開けて中を覗き込んで、なのはは目を見張った。

ベッドの上で上体を起こしたリヨウガ。彼の膝の上で、昼休みに見たあの鳥が身を丸めて、背中を撫でられていた。

赤系の色を中心に煌びやかな彩りの羽毛に包まれたその鳥は、以前本で見た鳳凰を思い起こさせて、なのはは知らず見とれていた。

「どうした？」

リヨウガの声で我にかえる。

「あ、うん。お夕飯出来たから、呼びに来たの」

「そうか。おい、雷駆」

リヨウガが膝を揺ると、鳥はムクリと頭を上げた。

「人が良い気持ちになってたつてのに、空気の読めないひよっ子だねえ」

そんな言葉を発してリヨウガの膝から下りた次の瞬間、鳥は全身から光を発して、赤い髪の女へと姿を変えた。

「雷駆さん……？」

「ふふん。どうしたんだい、鳩が豆鉄砲くらったような顔してさ」
「あの、その、人間の時も鳥さんの時も、雷駆さん凄く綺麗で……」
「当ったり前だろ？　　なんたってあたしはリヨウガが造った使い魔なんだからねえ」

容姿を誉められた雷駆は、嬉しそうになのはを抱き寄せる。彼女の豊かな胸に顔をうずめられて、なのはは改めてそのスタイルの良さに驚きを感じた。

「それは関係あるのか？」

ベッドから下りたりリヨウガが尋ねる。

「そりゃあ、優秀な魔導師が造ったんだから、その使い魔も優秀に決まってるさね」

雷駆はなのはを胸でホールドしたまま、主人に投げキッスを送る。リヨウガはヒョイツとかわす仕草をただけだった。

なのは、リヨウガ、雷駆の三人は席につき、黙々と食べ始めた。何か会話が欲しいと思ったなのはだが、今思い浮かぶ話題といえはあの銀仮面の魔導師やその助けに入った謎の女たち、或いは雷駆の事など、ガーディアンの仕事や魔法に関わる事ばかりだ。

（やっぱり、怒られちゃうかなあ……）

ほんの何時間か前に釘を刺されたばかりなのに、いささか躊躇われた。

「ん、やっぱり藤宮の唐揚げは美味いねえー！」

雷駆が鶏の唐揚げをホクホク顔で頬張る。

藤宮とは商店街にある精肉店で、その唐揚げはテレビ番組で紹介された事もある。

しかし……、

鶏の唐揚げ↓鳥肉。

雷駆↓鳥の使い魔。

『共食い』というフレーズが脳裏をよぎって、サアーツとなのは顔から血の気が引いた。

「ごっこ、ごめんなさい雷駆さん！ そんなつもりじゃなかったんですうううっ！」

「え？ なに？」

突然謝られた雷駆は、訳が分からずキョトンとしている。

「この事なら」

リョウガが箸でつまんだ唐揚げを示す。

「気にしなくて良いぞ。雷駆は鳥肉が好きだからな」

「そ、そうなの……？ でも雷駆さんは鳥さんで……」

「正確には、鳥型の使い魔だよ」

「基になった鳥も別世界の猛禽類。つまり肉食だしな」

「そうなんだ……」

とりあえず、鶏肉の唐揚げは無礼にはあたらないらしいとわかり、なのはは安心した。

「あたしの基になったのは、第十八管理世界にいるアंकという鳥でね。光の当たり具合で羽毛が色合いを変える事から、“空の宝石箱”なんて呼ばれてるのさ」

「性格は狂暴そのものだな」

雷駆の台詞に、リヨウガが継ぎ足す。

「自分よりも大きな馬や牛、下手すりゃ熊を襲う事すらある。見てくれとその強さから、その世界では神の化身とも悪魔の化身とも言われてるくらいだ」

「あー……うん、何となくわかる」

雷駆の戦いぶりを思い出して、リヨウガの説明が妙に納得出来る
なのはであつた。

「まあそういう事だから、この街の空は雷駆様が守ってあげるよ！
安心しな、ひよっ子！」

リヨウガの説明を賛辞と受け取ったのか、雷駆は機嫌良くカラカラと笑って、なのはの背中をバンバンと叩いた。

「はあ……」

なのはの溜め息が、バスルームに響いた。

湯船を満たす、少し熱めの湯加減によるものではなく、放課後の
わずかな数時間の間に色々あったその疲れによるものだった。

特に雷駆には、色々な意味で寿命が縮む思いをさせられた。

（でも、本当に綺麗だったなあ……）

使い魔の二つの姿を思い出して、知らずその可愛らしい唇の端が上がる。

あのスタイルの良さは同性として純粋に羨ましい。

鳥の姿の時は、あの煌びやかな姿で空を飛べばさぞ美しいだろう。

（それに……）

抱き上げられた時の、リヨウガの腕のたくましさを思い出すと、胸が高鳴った。

（リヨウガくん……格好良かったなあ……）

湯加減とは別の理由で、身体が熱くなる。

「自分の危機に雷駆が駆けつけた時、彼女は「リヨウガに言われて羽を伸ばした」と言った。あれは別の場所をパトロールしていた彼女に、リヨウガがなのはの家路も見えて回るよう指示したという事だろう。」

（私のために……私を、守るために……）

ぶつきらばうで愛想に欠ける少年。

しかし常に沈着冷静な少年。

「リヨウガ……くん……」

ポツリとつぶやく。

何とはなしに肩やうなじを撫でていた手が、十分に発育した胸に滑り落ちる。

閉じていた足を僅かに広げ、指は引き締まった腹部を過ぎて、更にその下へ――

「邪魔するよ」

「うわひやはいっ!？」

突然バスルームのドアが開かれて、なのはは奇声を上げた。
闖入者は構わずトコトコと入ってくる。
鳥の姿の雷駆であった。

「ら、雷駆さん……!？」

全力疾走の後よりも激しく、心臓が脈を打っている。今日一日どころか、十七年の人生の中でも一番驚いたかも知れない。

「背中洗ってくれよ、ひよっ子。リョウガはしばらく手が離せないらしくてね」

「は、はあ……リョウガくん手が離せないって、何か調べ物ですか？」

聞いてしまってから、また余計な質問だったかと後悔したが、雷駆は気にしない。

「みたいだねえ。そういう訳だからしっかり洗ってくれ。なんだってあたしゃ、あんたの命の恩人なんだからね」

「は、はあ……」

彼女のおかげで死ぬところでもあったのだが、敢えてそれは言わず、なのははタオルで前を隠して湯船を出た。

雷駆の身体に手桶でお湯をかけた後、石鹸で泡立てた指で洗い始

める。

「翼の付け根は念入りに頼むよ？」

「あ、はい」

言われるがままに洗いながら、その羽毛の美しさと手触りに、なのはえもいわれぬ幸せを感じていた。

洗い終えた後、もう一度お湯をかけて泡を流してから、なのははバスルームを出た。

脱衣所で髪と身体を拭き、制服と下着を入れてあつた籠に目をやると――ない。

籠は空っぱで、ただすぐそばにある洗濯機が音を立てて回っている。

「あのく、雷駆さくん……」

ドア越しに呼びかける。

「んー？」

「私の服がないんですけど……」

「ああ、ごめん。そういや洗濯物と一緒に洗濯機に放り込みまっ
てたよ」

「やっぱり……」

「乾燥機にぶっ込んで、朝までには乾かしとくから、今夜は優雅の
部屋から適当に借りとくれ」

「優雅、さん？」

「リョウガの姉貴だよ。昨日からミッドチルダに行つて、来週ま
で帰って来ないからね。構いやしないよ」

「……はあい」

入浴前より更に疲れたような気分で、なのはは返事をした。

雷駆はああ言ったが、念の為リヨウガにもお伺いを立てた方が良
いだろう。

なのはは裸体にバスタオルを巻き付けて、脱衣所を出た。
いったい何が悲しくて、よそ様の家をこんな格好でうるつかねば
ならないのだろうか……。

深い溜め息をつきながら、リヨウガの部屋の前に立ち、呼びかけ
る。

しかし、返事がない。

「何て格好してんだ、お前」

「ふええっ！」

その代わりに背後から声がして、なのははすくみ上がる。

リヨウガはトイレに行つて、ちょうど戻つてきたところだった。

「雷駆に着替えを持って行かせたはずだぞ」

「な、なかったよ？ 私の服も洗濯しちゃったみたいで……」

「あの鳥頭が……」

「それで、雷駆さんがお姉さんの部屋から借りて良いって……」

「姉貴の部屋はこつちだ」

リヨウガは自室の向かいの襖を親指で指し示す。

「あ、ありがとう」

なのはがペコリと頭を下げた瞬間、巻き付け方が緩かったのか、
バスタオルがハラリとほどけて床に落ちる。

当たり前だが、その下は生まれたままの姿である。

生まれたままの姿である。

なのはトリヨウガ、両者の時が止まり、そして――、

「キヤアアアアアッ！」

少女の悲鳴が廊下に響き渡った。

耳まで赤くなってうずくまるのは。

リヨウガは彼女の悲鳴に耳を押さえていたが、すぐにバスタオルを拾い上げて、少女の裸身にかけてやる。

「すまん。見てないから大丈夫だ」

何がどう大丈夫なのかはともかく、リヨウガはそう言い残して自室に入り、襖を閉めた。

なのははそれを見送ってから立ち上がり、かけられたタオルを巻き直して優雅の部屋に入った。

（本当に、見られてないのかな……）

後ろ手に襖を閉めながら、思う。

あのタイミングで、見られずに済んだとは考えられない。

そもそも見ていようがいまいが、あの状況では誰だって「見てない」と言うだろう。

（見られたよね、絶対……お父さんやお兄ちゃん以外の人に……リヨウガくん……）

ついさっきリヨウガの事を考えていたのに、そのリヨウガにあられもない姿をさらしてしまった。

「あうううっ！」

かつてない羞恥に、カーッと顔が熱くなる。

他人の部屋である事も忘れてベッドに飛び込んだのは、枕に顔をうずめて叫んだ。

「雷駆さんの馬鹿ああああああっ！」

しかし羞恥に悶える少女の叫びは、湯船にプカプカと浮かんでくつろぐ使い魔には届かなかった――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0616s/>

魔法少女リリカルなのはGuardian

2011年10月24日03時22分発行